

「新人会(前期)」の活動と思想

佐々木 敏 二

まえがき

一 新人会前史

二 新人会の結成と『デモクラシイ』の時期

三 『先駆』と『同胞』の時期

四 『ナロオド』の時期と新人会の改組

あとがき

まえがき

「新人会」の前期とは、麻生久、棚橋小虎、山名義鶴らを中心とする水曜会と、赤松克麿、宮崎竜介、石渡春雄らを中心とする東京帝大緑会弁論部有志が協力して、一九一八(大正七)年二月に新入会を発足させてから、一九二二(大正一〇)年一月三〇日の三周年記念懇談会で、会を純粹の学内団体とし、卒業生を非会員とするにいたる約三年余の時期のこととするのが妥当であるかもしれないが、機関誌『ナロオド』の廃刊が二二年四月であり、また非会員となった卒業生の多くで結成された社会思想社の機関誌『社会思想』の発刊が同年四月であるので、この研究論文においては、新入会結成の前史から一九二二年四月までを対象とする。

現在まで「新人会」について論じている文献は少なくない。その主なものを発行年代順にあげると、麻生久『黎明』(大正一三年)、菊川忠雄『学生社会運動史』(昭和二年)、林要「新人会のころ」(『歴史をつくる学生たち』昭和二年)、河上丈太郎編『麻生久伝』(昭和三年)、判沢弘・佐貫惣悦「前期新人会員」(『転向(上)』昭和三四年)、神田文人「学生の社会主義運動機関誌——『デモクラシー』から『無産農民』まで——」(『思想』昭和三八年二月号)、平貞蔵「東大時代の三輪」(『三輪寿士の生涯』昭和四一年)などである。

しかしこれらのものいづれも「新人会」の活動と思想を全体として取扱っているものではない。したがってこの研究論文においては、「新人会」の活動の種々の側面、その思想傾向の変化などをできるだけ年代順に追いながら三年余の新人会前期の果した歴史的役割を明らかにしたい。たしかに前期新人会員の大半は昭和一〇年前後からは社民系の団体から翼賛運動へと右へ右へと転向の道を歩いていったことは事実であるが、大正七年から昭和初年にかけての社会主義運動において前期新人会員の果した役割はそのことによって否定されるものではない。大正期後半の社会運動の推進力は、総同盟、サンジカリスト、共産党、学者などの諸種の団体やグループをよりどころとしているが、それらの諸団体にあつて新人会員は最も多くの指導者を生みだしている。その指導者たちの育った「新人会」そのものの性格を明らかにすることは、大正期の社会運動における指導者層の長所、短所、ひいては社会運動そのものの性格を知る上にも大いに役立つことと思う。

本論に入る前に主な前期新人会員の東大卒業年度を示しておく。()内は出身高校。

一九一六(大正五)年、岡上守道(二高)。

一九一七年、麻生久(三高)、棚橋小虎(三高)、山名義鶴(三高)、佐野学(七高)。

一九一九年、赤松克麿(三高)、石渡春雄(七高)、河村又介(七高)。

一九二〇年、宮崎竜介(二高)、林要(二高)、河西太一郎(二高)、嘉治隆一(二高)、三輪寿壮(二高)、磯山政道(二高)、石浜知行(二高)、平貞蔵(三高)、佐々弘雄(五高)、町野重之(七高)、波多野鼎(八高)、細野三千雄(八高)、児島健爾(八高)。

一九二一年、早坂二郎(二高)、山崎一雄(四高)、新明正道(四高)、門田武雄(七高)、松沢兼人(七高)、村上堯(二高)、東大在学中に病気で死去

一九二二年、河野密(二高)、小岩井浄(二高)、千葉雄次郎(二高)、住谷悦治(二高)、細迫兼光(三高)、風早八十二(三高)

一、新人会前史

新人会は、一九一八(大正七)年一二月初旬、東京帝大法科学生、緑会弁論部の赤松克麿、宮崎竜介、石渡春雄が吉野作造博士の協力をえて作った団体である。新人会は結成後まもなく麻生久らのグループであった「水曜会」(木曜会と呼ぶ人もある)と合流した。水曜会とは赤松らより二・三年早く東大を卒業していた麻生久、棚橋小虎、山名義鶴、岸井寿郎、岡上守道(筆名黒田礼二)、佐野学、野坂参三(筆名鉄・慶応卒)らが毎週水曜日に本郷根津の麻生の家に集って、社会問題、労働運動、ソヴェト革命についての研究会を開いていたグループであった。

新人会誕生の背景には、大戦中からの民主主義運動の高揚、ロシア革命、米騒動、さらには吉野作造対浪人会の言論戦、黎明会の結成などがあるが、直接的なきっかけは同年一〇月二七日京都市会議事堂で開かれた東西両大学弁論部の連合大演説会であったといわれる。

しかし、新人会の誕生についてのべる前に、まず新人会結成当時の構成メンバーと学内および学外の人々とのつなが

りを検討してみることが、新人会の誕生ならびにその後の活動のあり方を見ていくのに必要であろう。麻生グループと赤松グループとにわけてこの問題をまず検討してみようと思う。

(1) 麻生グループⅡ「水曜会」

麻生久が三高に在学したのは一九一〇（明治四三）年から一九一三（大正二）年までであったが、一九一一年一月に三高内に新しい会を作ろうという話もちあがり、岸上三郎（英送）、棚橋小虎、山名義鶴、岡林次郎、吉田三雄、岸田幸雄、清水英明、松永義雄、岸井寿郎、大西文一（以上独送）、大川秀二、行田貞夫、増田兼一、村田利之助、麻生久（以上仏送）などが集まり、この会を「縦横会」と名づけた。縦横会は特に目的がある訳でなく、自由に集って議論をたかかわし、お互の人生観を語りあう会であった。しかし縦横会に集った者は、現状に不満で、真面目に理想を求め、現状を打破したいという気持のみは一致していた。縦横会の交友関係は麻生らに終生の友を与えた。大学進学後離ればなれになっていた三高縦横会のメンバーのうち、東大に学んでいた麻生、棚橋、山名、岸井らのメンバーは一九一七年に入り卒業を間近に控えるようになった頃から再び集まるようになった。そのなかでも麻生、棚橋、山名の三人はツルゲエネフの『処女地』に深い感銘をうけ、「ヴ・ナロード」が彼らの思想となっていた。彼らは、よくロシヤの話をし、抱くべき思想は社会主義で、行くべき道は労働者の解放運動であると論じあった。卒業前の三月にロシヤに革命が起きた。しかし日本における社会主義運動は「冬の時代」であり、いかにして人民の中に入って行くか彼らには見当がつかなかった。麻生らは吉野博士の紹介で友愛会の鈴木文治に会ったりもした。しかし三人とも卒業と同時に労働運動に飛び込んだ訳ではなかった。麻生は、新しい運動を起したいという希望を持っていたらしいが、当時の社会事情を知りたという考えと、文学的才能に自信を持っていたので、新聞記者になることを考え、東京日々新聞編集局長城戸元亮のすすめで東京日々新聞に入社、政治部に籍を置いた。また棚橋には友愛会入りの話もあったが、郷里の老母を養わねば

ならないという生活問題がからみ、棚橋は司法官試験から検事をやることになって、東京裁判所に入った。山名は就職をあせる身分ではなかった。

「水曜会」がいつから始まったかは明らかでない。麻生、棚橋、山名、岸井らが実社会に出てから、早くから家庭を持っていた麻生の家で、天下を論じ革命を談じあっていたことに端を発するものである。このグループに後から参加したメンバーの主なものとして、野坂参三、岡上守道、佐野学の三人がある。

野坂参三は一九一五年慶応を卒業するにあたって、卒業論文に労働問題を書いて友愛会に投じた。(この年久留弘三(早大、酒井龜作(日大)が友愛会入りをしている)。一九一六年五月には雑誌『社会改良』が創刊され、野坂がその編集長となっていたし、同年一〇月坂本正雄出版部長の早稻田入学後は『労働及産業』も野坂の所管となった。ロシヤ革命の直後の一月二四日、友愛会で青年労働者と東京帝大・慶応・早稻田の大学生との連合弁論大会が開かれた。立錫の余地のない大成功であったこの会の閉会后に、学生と労働者の代表の懇談会がもたれ、新しい会の結成が決定され、一二月三日第一回委員会がもたれ「労学会」と名付けられ、会長鈴木文治、副会長北沢新次郎(早大教授、幹事野坂・久留らが決定された。労学会の目的は、青年労働者と大学生による社会問題の共同研究であり、『社会改良』がその機関紙的役割を果すことになった。翌一九一八年六月、労学会の名称はロシヤの労兵会に類似するので当局の圧迫が予想されるとして「社会問題研究会」と改めて、活動を継続した。(東京で労学会が名称を変更した直後の九月、京都では高山義三、古市春彦や京大生水谷長三郎、小林輝次らによって京都労学会が結成された)。

麻生らと労学会とは直接の関係はなかったようであるが、労学会結成の頃には野坂との交友関係はすでにはじまっていたようである。そして一九一七年の暮頃より「水曜会」は定期的に毎週水曜日麻生の家で開かれ、ロシヤ革命と日本の労働運動の将来などを話題としながら会合が続けられた。麻生は、一九一八年一月二日から七回にわたって東京日

々新聞に「ピーターからレーニンまで」と題する論文を執筆し、「ボルセヴィキイの革命は、露西亞の国民性に最も適合するものであって、決して倒れるものではない。ケレンスキー等の革命は畢竟露西亞かぶれの革命で、露西亞の国民性と合致しない。……露西亞の革命が西欧かぶれのケレンスキーに満足せずして、真実の露西亞人にして神秘的現実主義者たるレーニンのボルセヴィキイ革命に行くのは極めて自然である。ボルセヴィキイの革命は深く露西亞の国民性に根底しているからして、決して倒れるものではない。而も、その革命の性質は、人類の次ぎの時代が当然に進むべき方向に真直ぐに向つてゐるに於てをや。」とする彼のロシヤ革命についての見解を世に問うた。麻生のロシヤ革命についての理解は、革命の意義を正確につかんだものであるとはいえないとしても、革命とその方向を當時にあっていち早く見抜いた見解の一つであった。そしてその後麻生は野坂の編集する『社会改良』に「民貧にして国乱る」(二月)と「労働者の国際的使命」(五月)をつづけて書いている。麻生グループと野坂との結びつきはこの頃になって、野坂・麻生の関係から密接になり、水曜会に野坂が出席するようになってゐる。

当時の水曜会のメンバーを見ると、「麻生は演壇に立つて吼える型、棚橋は一直線に行動に進む人、山名は深い教養と広い勉強をしながら酒をのんで微笑している人、岸井は仕事師タイプ」⁽⁵⁾、野坂はその頃イギリスの労働運動や西欧の社会主義をコツコツ研究していた。

四月の終り麻生は「ピーターからレーニンまで」が縁で満鉄調査部に勤めている岡上守道⁽⁶⁾と会った。岡上は一高出身で帝大政治学科を一九一六年に卒業した一年先輩である。しかし彼らが始めて知りあったのは二人がまだ高校生であつた時の一高、三高の第一回連合演説会であつた。語学に堪能な岡上は、満鉄調査部でその豊富な蔵書と資料を利用して、ロシヤ革命の研究に専念していた。麻生・岡上の再会の直後から水曜会の集りに岡上が参加しはじめた。水曜会での岡上の発表は当時の日本ではめずらしい新資料を用いてのロシヤ革命の詳細な研究であり、水曜会での研究発表は岡

上のロシヤ革命の研究と野坂のイギリス労働運動の研究がその中心となった。

水曜会の会合ではこれらの研究活動とともに、日本の黎明のことがつねに話題となり、具体的には友愛会の改革が問題となっていた。当時の友愛会では、久留は関西で活動をしているし、野坂はイギリス留学を考えていたので、水曜会のメンバーで最も行動的なタイプの中橋の友愛会本部入りが話題となった。またこの頃、麻生らは、当時星島二郎らがやっていた『大学評論』を『デモクラシイ』と改題して大いに啓蒙活動しようとして大学評論グループに提案したが、デモクラシイなんて表題にしたら一度に発禁になるという反対意見にあって、その案は実現できなかった。⁽⁷⁾

また、米騒動が東京にまでおよび、日比谷に集った群衆が銀座に流れ、上野にいたり、街上に破壊の跡を残した八月一三・四日には、水曜会の麻生、山名、野坂らのメンバーはこの群衆の中にあり、新しい時代の息吹を味っていた。

そして米騒動が止まった直後、中橋は東京裁判所をやめて友愛会に入った。またその頃に内務省保健衛生調査会(所長高野岩三郎)が労働者の生活調査をはじめることになり、そのための調査所の場合と人を求めていた。麻生ら水曜会のメンバーはその場所として日本のクロナスタットといわれる月島をすすめ、担当者として山名をおした。そしてまもなく、中橋と山名は月島に住むようになり、労働者の中で生活を送りはじめた。

やがてこの水曜会のグループに東京帝大学生の赤松克麿が時々顔を見せるようになったし、一九一九年一月末になつて岡上守道の紹介で満鉄調査部に勤めている佐野学⁽⁸⁾が加わった。

(2) 赤松グループⅡ「緑会弁論部」「普選研究会」

一九一八年の一月頃から、東京帝大のなかに、官吏となり、資本家の代理人となることを無上の光栄とする立身出世主義の人生観を打破し、人格の陶冶を社会問題と労働問題の解決のうちに見出そうとする学生の一団があらわれはじめた。彼らは期せずして吉野作造を中心として集まっていた。ことに吉野は法科大学緑会弁論部に部長として関係を

もち、また弁論部に集まる学生は好んで新思想を語る人びとでもあったので、この一派の動きは大学内部の思想団体の動きのように見られる傾向があつた。米騒動直後の新学期に緑会弁論部委員の改選があり、赤松克麿(三高)、宮崎竜介(二高)、石渡春雄(七高)らが選ばれた。新人会誕生への動きは、この秋に、新委員らを中心とする緑会弁論部員が、恒例の東西両大学連合演説会に出席するために京都に出かけたことに端を発するといえる。

一〇月二七日、京都市会議事堂でひらかれた両大学連合演説会の演題は次のようなものであつた。⁽⁹⁾

開会の辞 京大教授 佐々木惣一

大和民族の危機 東大 宮崎竜介

世界の大乱と日本の経済 京大 津田元一

大学の本質 京大教授 曄道文芸

如何に進むべきか 東大 赤松克麿

青年立国論 京大 田万清臣

生命の脅威 東大 野中徹也

講和問題 東大教授 吉野作造

しかし九月に京都勞学会を結成して、東京の学生よりも一步先んじた姿勢をもっていた京都勞学会の連中は、この連合演説会の機会に東京の連中を説伏しようという意図をもっていた。新思想家をもつて任じていた東大側の委員は、京大側から、象牙の塔から抜けきらぬ態度をなじられ、強いショックを受けた。そして京都よりの帰りの車中で、赤松、石渡、宮崎の三人は新しい会を組織することに意見が一致した。⁽¹⁰⁾彼らにとっては、京都側の「講壇のデモクラシーを捨てろ」という言葉が骨身にこたえた。しかし緑会弁論部という組織は実践とは無関係な組織であつたので、民衆の中に入るための実行団体的組織を作ること考えた。

赤松克麿⁽¹¹⁾、宮崎竜介⁽¹²⁾、石渡春雄⁽¹³⁾の三人が大学にもどつて最初にはじめたのは、『普選研究会』という名で同志を集め、

新思想を研究し、社会運動に参加する準備をすることであった。普選研究会には三人のほかは野中徹也(四高)、鈴木義男(二高)らも参加していた。しかし普選研究会は二、三回開かれたのみで、普選の研究はほとんどやられなかった。この間の時期に赤松は三高の先輩でありまた緑会弁論部の先輩である麻生との結びつきを深め、水曜会の会合に出席している。普選研究会から新人会への移行は、吉野対浪人会の立会演説会と黎明会の結成への動きのなかで準備されたといえる。その点を見ておくしよう。

吉野対浪人会の立会演説会のおこりは、周知のごとく、一〇月の浪人会による大阪朝日新聞襲撃に憤慨した吉野が『中央公論』一一月号に「言論自由の社会的圧迫を排す」を発表し、浪人会を非難したことにはじまる。吉野論文に怒った浪人会は、東京におけるデモクラシーの最大の論客吉野作造のペンを折らせようとして、十一月一六日吉野を研究室に訪れ、この論文の弁明を求めた。その後学内で対談を持ったが、学生は吉野擁護を叫んで会場を包囲し、浪人会を威圧した。浪人会は大学内では暴力をふるいかねていたし、吉野から学士会館での新聞記者を集めての立会演説会の提案があったのを幸いに、浪人会は神田の南明倶楽部での公衆を集めての立会演説会を要求した。これを吉野がうけて立ったのが南明倶楽部での吉野対浪人会の立会演説会である。この立会演説会は吉野の理論的勝利と吉野への民衆の圧倒的支持で終わったが、その様子については幾多の著作に詳しいので省略して、学生と先輩の動きでこの論文に関係の深いことのみをひろってみる。

立会演説会の当日である十一月二三日の午後、東京帝大三二番教室で緑会弁論部の臨時総会がひらかれ、五、六百名の学生が参加し、「吉野博士を守れ」、「浪人会を葬れ」というスローガンのもとに熱弁がくりかえされ、「一人残らず南明倶楽部へ行こう」という緊急動議が可決された。そして緑会弁論部を中心とする東京帝大生の多くが吉野擁護のために南明倶楽部に結集した。この中心にあったのが赤松、石渡、宮崎らであったことは言うまでもない。

また吉野は立会演説会の申入れを受けて立つ決心をした直後麻生を訪れた。麻生はそれに賛成し、当時吉野に不利な記事を掲載しがちであった東京日々新聞と吉野との意志の疎通をはかるために努めた。また麻生は当日はずっと吉野のそばについて、吉野の護衛の役を演じた。

また同郷の後輩として吉野から学生時代より愛されていた友愛会の鈴木文治は、立会演説会の当夜は、会場の内外の連絡にあたり、満員のため場外に残された民衆のために演説会の模様を逐一報告する役をかって出た。

この夜の聴集の中には、帝大の学生のほかに、各大学の弁論部を中心とする多くの学生と友愛会の労働者が多く参加していた。この立会演説会は、まさに浪人会による大阪朝日新聞襲撃事件以来不安に襲われていたデモクラシー運動に大きな鼓舞激励を送るものであった。

しかしこの立会演説会から一九一九年前半の時期を考えてみるに、麻生久の果した役割は非常に大きい。

一つは黎明会の設立準備の仕事である。立会演説会が吉野の勝利で終わった時、麻生は浪人会のような組織に対決するためには、政治、経済など各方面の識者を結集した一つの団体を作ることが必要であると考え、そのためにはまず吉野作造と福田徳三（東京高商）の提携を考え、ただちに行動をおこした。麻生はまず吉野の了解をとり、翌日雑誌『中外』を訪れ社長や主筆の内藤民治と会って計画を相談、その翌日には内藤と一緒に福田徳三と会い同意を得て、吉野、福田、内藤、麻生の会談を実現させた。そして、二月四日夜学士会館でこの四名に普選論者として有名な今井嘉幸代議士と『中央公論』主筆滝田樗蔭と『中外』の社長の七名が集まり、「黎明会」発起の打合せを行っている。そしてその夜大綱三則が定められた。

一、日本の国本を学理的に闡明し、世界人文の発達に於ける日本の使命を發揮すること。

二、世界の大事に逆行する危険なる頑迷思想を撲滅すること。

三、戦後世界の新趨勢に順応して、国民生活の安固充実を促進すること。

そしてこの大綱に賛成しそうな各大学の教授ならびに在野の思想家数十名に創立総会の案内を発送した。発会式は予定された一六日より一週間おくれて二月二三日学士会館で開かれた。最初から参加した会員は次の人びとである。

阿部秀助、麻生久、柿崎正治、今井嘉幸、占部百太郎、大庭景秋、大山郁夫、大島正徳、木村久一、五来欣造、左右田喜一郎、滝田哲太郎、高橋誠一郎、朝永三十郎、内藤民治、中目尚義、新渡戸稲造、福田徳三、穂積重遠、三宅雄二郎、森戸辰男、吉野作造、以上三二名。

あとで参加したのは。次の人々である。

堀光輝、堀江婦一、得能文、富永徳磨、大河内正敏、川合貞一、与謝野晶子、田中萃一郎、永井潜、上田貞次郎、内ヶ崎作三郎、内池廉吉、桑木巖翼、厨川辰夫、小泉信三、阿部次郎、佐々木惣一、佐野利器、三辺金蔵、北沢新次郎以上二〇名。

黎明会は一九一九年一月から毎月講演会を開いたが、聴衆は会場にあふれ、講演速記の『黎明会講演集』は飛ぶように売れた。まさに待ち望まれていたものが民衆の前に姿を現わしたという感じであった。しかし黎明会は民衆の間人に気が高まるにつれて、内部は学者だけの団体となっていくたし、一九一九年もなかばを過ぎ、民衆がその眠りからさめて起ち上がり、社会運動が活潑になるにつれて、会の内部は護憲・普選的な立場から一歩外に出ようとすると会員各自の意見が統一できず、黎明会の姿もいつのまにか影がうすくなっていった。一九二〇年八月に黎明会は使命を終ったとして解散するが、時代の進展があまりに早く、会の方があとにとり残された観がある。しかし、『中央公論』をバックにもつ吉野作造と、『中外』をバックにもつ福田徳三との提携を基礎に、当時の進歩的学者・文化人の統一戦線を促進せしめ、右翼の攻撃からデモクラシー運動を守り、やがて来る社会主義運動の時代への橋渡しという使命を黎明会は立派に果たしたといえよう。

麻生が黎明会の結成と同時に推進したもう一つの仕事は、「新人会」結成の推進と援助である。一九一八年の末には水曜会のメンバーでは、棚橋はすでに友愛会に入り、山名は月島の労働保健調査所の仕事に従事していたので、比較的自由にとびまわれるのは麻生であったことにもよるが、緑会弁論部の先輩として赤松、石渡、宮崎と絶えず接触していた麻生は、彼らの思想団体結成の希望を察し、それを援助した。

新人会誕生は、このような浪人会対吉野の立会演説会以後のインテリの統一、黎明会の発足への動きに学生が敏感に反応したという一面と、水曜会メンバーとの交流によって学生達の活動に方向が与えられたことによるといえよう。

- (1) 河上丈太郎編『麻生久伝』(七三ページ)では、「水曜会」といつているが、思想の科学研究会編『転向』(上)の判沢弘・佐貫愷悦「前期新人会員」では「水曜会」といつている。麻生、棚橋ともに会合は毎水曜日にもたれたといいつていることからして、「水曜会」が正しいと思われる。(麻生久「黎明」九三ページ)。山川、西、田所らの「水曜会」と混合されやすいが、麻生らの水曜会は、一九一七年〜一九一九年に研究会をもつていたグループであり、山川の「水曜会」は一九二一年〜一九二二年である。麻生久は、一九九一(明治二四)年五月二四日大分県玖珠郡東飯田村の地主の家に生れた。大分中学四年の時に校長排斥を叫んでストライキを決行し、その首謀者として無期停学処分をうけた。三高三年の時に、刑事が学校に踏み込んだ事から起つた憲政擁護運動に関連し、校長を問責し陳謝せしめるなど、学生時代より改革運動のリーダーとしての面目を表わしている。東大時代は学籍は法科にあったが、教室にはほとんど出ず、法律よりも小説を耽読した。ことにトルストイ、ツルゲエネフをはじめロシヤ文学に心を惹かれ、ヴ・ナロード的な生き方を心に描いていた。
- (2) 棚橋小虎は、一八九〇(明治二三)年長野県松本市に生れた。彼の在学中の校長小林有也は名校長として有名であり、生徒の自治権を尊重し自由主義的態度で教育にあつた。棚橋の思想形成にはこの校風が大きな影響を与えているといえよう。三高時代は縦横会員としてすごし、東大に入つてからはあまり教室に出ずに、先輩として母校松本中学の校長排斥運動(小林校長の後任が一切の自治権を認めぬことからこつた)などで飛びまわつてすごした。
- (3) 山名義鶴は、一八九一(明治二四)年九月一七日青森市外に生れた。山名宗全の後裔といわれ、祖父の代までは京都府出石藩主。父義路は男爵で元貴族院議員だったが、破産したため礼遇停止となる。麻生、棚橋と縦横会員としてすごしたのみならず、ことに棚橋とは三高時代京都黒谷に家を借りて一緒に自炊生活をしたこともあつた。礼遇停止中とはいえ長男である山名は、男爵を

つぐ身分であったが、彼は礼遇停止を身軽になつたとして喜ぶ状態であつた。

(5) 麻生久『黎明』七四ページ、(大正一三年、新光社版)

(6) 岡上守道の生い立ちの詳細は不明である。土佐に生れ、年少にして大阪に出て、いろいろな人生の苦勞をし、その後一高を経て、東大政治学科に学び、一九一六年卒業、大学教授を志したが、恩師高野岩三郎博士より、君のような思想の持主が大学に残ることは無理であるといわれ、松岡均平博士をたよって、満鉄の東亞經濟調査局に就職し、主としてユダヤ人問題とロシアの農村問題との研究に従事していた。語学を得意とし、十数カ国語を話し、特にロシア語にすぐれていた。ペンネームである黒田礼二という名前は、クロボトキンとレーニンとをつなぎあわせたものである。(嘉治隆一『歴史を創る人々』昭和二十三年、二二一—二二八ページ参照)

(7) 麻生久『黎明』七一—七二、二二二—二二三ページ参照

(8) 佐野学は、一八九二(明治二五)年二月二二日大分県速見郡杵築町に生れた。家は代々医者で父喬達は松平杵築藩主の藩医であつた。長兄彪太は駿河台の佐野病院長で、その妻は後藤新平の養女であつた。曰杵中学四年の時、校長排斥運動を起してストライキをやリ、その時山羊の首を祖先伝来の日本刀の先にさして、「校長の首もこの通りだぞ」と叫んだというが、このために退校を命じられた。その後七高に入り、一九一四年東大法科に入学、大学時代の成績は優秀であり、恩賜の銀時計をもらつて卒業した。在学中より社会主義の研究に熱中し、卒業後は満鉄調査部に入った。満鉄を辞めて後、嘱望されて早大教授文学博士金子馬治の娘と結婚し、早大講師となる。

(9) 渡部徹編『京都地方労働運動史』、一〇〇ページ。

(10) 菊川忠雄『学生社会運動史』昭和二十二年、三一—三四ページ参照、宮崎重介「新入会当時の思い出」(ねず・まさし『日本現代史3』月報No.3)

(11) 赤松克麿は、一八九四(明治二七)年山口県徳山町で生れた。祖父は西本願寺執行長として西本願寺王国の実力者であつた赤松連城である。彼の父照懂は宗教界の現状にあきたらず僧籍を去つて郷里に徳山高等女学校をおこし、また社会事業に心を傾けて免囚保護、孤児院を開き、晩年は水平部落に入るなど社会改善につくした。長兄智城(文博)、次兄信麿(医博)、三兄義麿(美学)はいずれも学者であり、克麿は四男、五男、五百麿は京大河上門下で後の労働党の闘士、妹の常子は後の総同盟の婦人部長、六男に廉麿がある。七人兄弟のうち三人は学者、三人は社会運動家として育っている。徳山中学三年の時、自治権を要求してストライキを指導、退校を命ぜられた。直ちに専門学校検定試験に合格し、すぐに三高入試に合格、同級だった林要、莊原達

より一年先になった。

(12) 宮崎竜介は、一八九二(明治二五)年一月二日熊本県玉名郡荒尾町に生れた。祖父長兵衛に五人の男子があり、長男八郎は明治初年自由民権運動に参加した人だが西南戦争で討死。次男伴蔵はロシア語を研究しロシアに渡ろうとしたが夭折。三男民蔵は若くして欧州に渡り、帰国して後、土地均分論をとまえ、幸徳事件の際に嫌疑をかけられた。四男弥蔵と五男寅蔵は支那の改革が世界の問題の解決の鍵と考えた。弥蔵は途中で病死したが、寅蔵は孫文をたすけて中国革命に協力、一九〇五(明治三八)年東京にいた寅興と孫文を握手させ中国革命同盟会を作らせた。これが中国国民党の萌芽である。この寅蔵こと宮崎滔天が竜介の父である。父が家を外にして東奔西走している間は、母が熊本で牛乳屋をして育てた。一三才の時、弟の手を引いて上京、浪花節語りをしていた父をたずねた。郁文館中学から一高・東大に進んだが、一高、東大時代に父の影響で関心をもつ中国を二回巡遊した。一高時代の中国旅行の際に病をえ、三年間休学をした。新人会結成当時、宮崎は赤松らより年をとっていたが、学年は一級下であった。

(13) 石渡春雄については、生い立ちの詳細を知らない。東京浅草の生れ。七高から東大法科に進んだ。新人会結成以前から社会主義的文献を読みはじめていたらしい。卒業後はしばらく裁判所に勤めていたが、まもなく弁護士となり、一時鉦夫組合関係の弁護士として活動したが、そのうち社会運動との関係を断った。

二、新人会の結成と『デモクラシー』の時期

(1) 結成から『デモクラシー』発刊

宮崎竜介の記すところによると、一九一八年一月下旬に新人会結成のことについて、赤松、石渡、宮崎の三人がほとんど毎日、大学の門前に新しくできた『鉢の木』という洋食屋の二階に集って、一週間程討論を続けた結果、結局学内に同志を求めることとして、新人会という会名で学内の提示板に次のような綱領と短い説明文をはり出した、とのことである。

一、吾徒は世界の文化的大勢たる人類解放の新氣運に協調し之が促進に努む。

一、吾徒は現代日本の正当なる改造運動に従ふ。

無垢なる良心と透明なる理知とを持つた青年達は、人類生活の現状を到底黙視することが出来なくなつた。そして已み難き革新的熱意に駆られて奮起した。我々は何物にも囚はれない。我々は唯真理を信じ理想を目標けて邁進したい。

集会の場所は第二学生控室とされたが、当時は控室の借用は教授の許可が必要であつたので、三人は吉野に事の次第を話した、吉野はすぐに承諾した。それからの会合は主として第二学生控室でもたれた。

一九一八年一月五日、⁽²⁾ 宣伝をかねて会員を募集する集会が持たれた。これに應じて集つたものは二〇余名。三人が会の主旨をのべ、普選研究会や緑会弁論部から一步前進しなければならぬ旨を力説した。そして質問に應じた後に賛成者を募つた。この第一回の会合の時に入会した者は、三年生はなく、二年では波多野鼎(八高)、細野三千雄(八高)、児島健爾(八高)、佐々弘雄(五高)、平貞蔵(三高)、一年では門田武雄(七高)、山崎一雄(四高)、新明正道(四高)、早坂二郎(二高)、村上堯(一高)であつた。

そして新人会は、月二回位集つて思想の研究ならびに会員の精神的結合をはかるとともに、時々講演会を催して主張の宣伝をやることを決定した。

新人会は、一月三〇日大山郁夫を法科三三番教室に招いて「新人の意識」の講演、二月二〇日には第二学生控室で松波博士の「徴兵制度撤廃論」、同月二七日には三三番教室で有島武郎の「自分の芸術について」の講演を催して学内の啓蒙宣伝に努めた。

特に一月三〇日の講演会は新人会の活動の最初ともいふべきものであつたが、午後三時からの講演会には聴衆約四〇〇名、大山郁夫のほか大学評論の星島二郎、水曜会の麻生らが参加して演説をした。それまではそれほど思われなかつた新人会の力もこの時から学内に大きな影響を与へだした。夜の晩餐会には四・五〇名の学生が集まり気焰をあげ新

人会の歌が幾度となく合唱された。

新人会の発足当時のメンバーの意欲と自己規定を最もよく示しているのは新人会の歌である。

一、東方の眠り久しき国の児等今燦爛の新たなる

光明に覚む嬉しからずや。

二、閩族と阿権と利己と曲学の力合せて塞ぎたる

世界思潮の涛はとばしる。

三、空ひたす世界思潮に身を乗せて立てる姿を今見よや

至高学府の青年の意気。

四、権力の前に土下座を強ひられし時を去ること五十年

奴隸の夢は今ぞ昔。

五、世は移り時は過ぎ行く何時までか意気の青年閩族の

奴隸となりて身をせばむべき。

六、閩族の垣と呼ばれし不祥の名今ぞそそがん赤門の

健児の意気を入々よ見よ。

赤松の作詩といわれるこの新人会の歌は、新しい時代の波を敏感に受けとめ、新しい運動をはじめようとする彼等の意欲をよく表現している反面、「至高学府の青年の意気」というエリートとしての自己規定をも含むものであった。そしてこのエリート意識は運動の展開のなかで、ある時は優越感としてあらわれ、指導者意識としてあらわれるとともに、ある時には劣等感としてあらわれ、労働者のおかれている現実に対する無知、自分達の理論の空疎さからくる卑屈さと結びつくことがしばしばあった。

しかしそのようなことはともかくとして、彼らは学外の活動をも積極的に展開した。

一九一九年に入ると普通選挙要求運動は再び組織的になり、「普通選挙同盟会」をはじめ青年団体、政党の運動は活潑になった。吉野は『中央公論』二月号に「選挙権拡張問題」を発表して普選断行を要求した。このような気運に動かされて、早稲田大学には「普通選挙促進同盟会」日本大学には「学生同盟会」などの団体が生まれ、新人会などと一緒になって都下の学生は普通選挙要求に向って動いていった。まず新人会は憲法発布三〇周年記念日にあたる二月一日の紀元節の日に都下の各大学学生を糾合して大示威運動を行う計画を決めた。ついで早稲田の普選促進同盟会は各大学に檄をとばして二月七日午込清風亭に各大学の有志を集め会合を持ち、三四名の代表の中から実行委員六名を挙げ、都

下全大学の普選要求団体の団結を決議した。同日神田松本亭に集合した全国学生同盟会も同様の決議をして、歩調を一つにして二月一日の大示威運動に臨んだ。

二月一日、都下各大学の弁論会、新人会、普選促進同盟会の主催による普通選挙要求大会が午前一〇時より日比谷公園運動場において開催され、学生千名以上が集まり、官憲との間に多少の軋轢があった後に、各々三〇人を一隊として委員指揮の下に衆議院におしかけ宮城前まで示威行進を行い解散した。解散後各代表は神田小川町常盤楼に会し、今後の運動方針について協議し、普選実施についての上奏、各政党の選挙権拡張案および政府案の撤回要求、各政党幹部および議員の歴訪などを決議した。そして同夜神田青年会館で開かれた普通選挙期成同盟会主催の大演説会に合流した。(この時、開会中の第四一帝国議会では、結局政府案が成立し、大選挙区制が小選挙区制と改められ、選挙資格の納税要件は直接国税一〇円から三元に引き下げられた。これによって有権者は一五〇万から三三〇余万と二倍近くになったが、有権者は全人口の五・五パーセントにとどまるものでしかなかった。)

この二月一日の普選要求大示威運動が宮城前で解散し、宮崎竜介が帰ろうとして電車を待っている時に、普選獲得運動の仲間に入れてくれという一人の青年労働者に会った。その青年は永峰セルロイド工場に働らく渡辺政之輔であった。宮崎は、労働者なら普選運動よりも労働組合運動をすることの必要なことを話し、新人会の会合に出るようにとすすめた。それに応じて、渡辺政之輔、菴沢義夫らの労働者が新人会の会合に出席し、その日の会合で、労働者を新人会の会員として認めることが決定され、新人会は活動を学内に限定せず、労働組合運動にも直接手をつけることになった。『デモクラシー』一号の巻末の新人会記事に「本会は学校的観念を離れて唯純真なる青年団体として社会の各階級に開放し同志の糾合を図りつつある」とあるのは、このことを意味している。

二月二四日には渡辺政之輔らにより新人会亀戸分会の発会式が計画され、新人会本部からは、先輩の麻生と学生赤

松、宮崎、波多野ら八名が参加した。ヴ・ナロード的熱情にもえた学生たちは、三〇人程の労働者を前に、それぞれ演説をした。それを宮崎は、「純真なる道義の絶叫が加わるにつれて、寂たる工場地の一角に黎明の警鐘が高鳴り、改造の力が湧き出て、新世界の萌芽が発生した。会衆の感情は熱し意気は昂り、確信と決意とは満堂に漲り、誤れる社会制度、墮落せる政治組織、腐敗せる人心に対する憤怒と憂愁とは、会衆銘々の心臓を衝いて、一同は時の移るのを忘れ、互に胸襟を開いて話合うのであった」⁽⁴⁾とのべている。この同じ夜のことを、すでに社会に出て労働運動ともすでに相當の接触をもっていた先輩の麻生は、「世の中と云うもの、社会と云うものを知らないで、若い気持の上に、また彼等の読んだ幾冊かの書物の知識の上に、容易に、彼等の革命と新社会の建設を夢見ている彼等にとつては、亀戸の一角に一つの組織を作り得た事は、將に彼等の天下がもう眼の前に近づいた証拠に外ならなかった。……学生達は自分等の読んだ書物から得た概念に、非常な昂奮の衣を着せて、労働者達に投げつけた。……それを聞いている労働者達は、それが正確に何を意味しているかは、演壇で叫んでいる学生達と同じように分らなかつたが、……資本家が怪しからんと云う事ははつきり分つた。……彼等は凱旋將軍の様な心持を抱きながら帰つて行つた」⁽⁵⁾とのべている。

この宮崎の言葉と、麻生の言葉との間には労働運動に対する見方のちがいがはつきりと見えている。旧時代の末期の闇の中にさまよいながら自己の生きる道を労働運動に参加または協力の道に撰んだ水曜会のメンバーには、わが国での労働運動の展開の困難さへの認識とその経験があつたが、学生達の方は、新しい時代の波が大学の中に非常な勢いで流れ込んで来た時代に理論に酔ひ恋にあこがれながらヴ・ナロードをとなえるという甘さがあつた。このような後輩の指導のために、水曜会のメンバーは新人会の会合のたびごとに参加し、いろいろな面で後輩の指導にあつた。佐野は、国家を論じ、プロレタリアートの新興を論じ、社会の変革を力説した。棚橋は労働運動について語り、山名は労働者の生活の実態をつげ、麻生は学生に運動への情熱を身をもって示してみせた。

新入会は年があらたまるとともに機関誌発行の準備にとりかかっていたが、一九一九年三月六日『デモクラシー』が発刊された。菊刊二〇ページ、一〇銭、発行兼編輯人信定滝太郎、印刷人岡本佐俊、印刷所三光堂、発行所東京市本郷区追分町一九番地新入会デモクラシー発行所である。(全巻八号のうち二、五、八号は発禁、二号は現物なし。六号は当局の圧迫により伏字多し。八号のみ三六ページ。発行兼編輯人は八号のみ新明正道。印刷所は四号より日東印刷株式会社。四号より発行所の外に事務取扱所東京市外高田村三六〇〇番地を付記。) この発行所の住所、印刷所、発行編輯人ともに『大学評論』と同一であり、発行の資金に星島二郎の援助があり、また星島の紹介で新入会の会員でない信定が発行兼編輯人をひきうけている。⁶⁾ (前述のように麻生が『大学評論』を『デモクラシー』として発行しようとして大学評論のメンバーに反対されたことなどあわせて考えてみると、水曜会、新入会と大学評論メンバーの間に密接な関係があったことがわかる。)

誌名の由来は、「民本主義」の訳語には不満であるが、「民主主義」と題するのは当局の弾圧が予想されるとして、名がそのままとられたのである。そしてその内容は、名の示すごとく多種多様であった。そのことはまた毎号必ずページ目にかかげられた思想家の写真からもうかがえる。それはルソー、トルストイ、マルクス、クロポトキン、リンカーン、ザメンホフ、ローザ・ルクセンブルグであった。

創刊号の目次をあげてみると。

—主張—ネオ・ヒューマニズム

発行の辞

—宣伝—青年智識階級の一使命

—評論—永遠の平和へ

—研究—瑞西の国民投票

無産階級解放の道(一)

参政権の原理

観風子(赤松?)

麻生久

宮崎竜介

森庄三郎(東大教授)

月島新(佐野学)

植田四郎

リープクネヒトの軍国主義観

隅田春雄（石渡春雄？）

デモクラシイの第一義

生田長江

社会主義及社会運動（ゾムバルト著）

野坂鉄

—人物評伝—赤裸の人ルソー

血潮子（宮崎竜介）

—小説—ネツダーノフ（ツルゲネエフ）

そのほかに、露西亞のニヒリズム、眠り（詩・ツルゲネエフ）、普通選挙要望の檄、海外時評、解放運動消息（黎明会、

友愛会、新人会、民人同盟会の記事）がのっている。

麻生が執筆し、赤松、宮崎、石渡が賛成したといわれる「主張」と、観風子の署名のある「発刊の辞」より彼らの現状認識と問題意識を見てみよう。

彼らの現状認識によると、社会は「戦場は死屍に栄え、監獄は貧窮者の犯罪に栄え、邸宅は貪婪飽くなき資本家の富に栄え、貧民窟は無智と疾病と悪臭とに満ちている。地は権力と奴隸と反抗と饑飢と不安に蔽われて争奪と殺戮の海である。……資本家は戦争に依ってかち得たる富を失わずらなうがために食なき労働者の首を刎ねている」（主張）ところの不合理的状態にある。「しかし今や人類解放の大潮流は滔々として世界の隅々にまで波打って来た」（創刊の辞）、大戦後の状況がそれを示している。しかし「この黎明期に際して誰が現代日本の改造の局に当るべきか。現在国民の指導的地位に立てる特権階級は如何、有識階級は如何、官僚、軍閥、政党、政治家、資本家、大学教授——彼等に其資格無き事は彼等の過去現在の行状が最も雄弁に立証している。……我々はすでに支配階級に絶望した」（同前）とのべ、そこからして、「改造の主動者たるべき者は純真なる良心と聰明なる理智と熱烈なる気魄とを有する青年自身でなければならぬ」（同前）と日本の改造は青年の任務であるとす。そのなすべきことについては、「彼等の期する処は力を以て信仰を以て愛と平和の世界を妨ぐる物質的生存競争の組織を絶滅して人類を物質争奪の現状より解放せんとするに在る。人類

相互の關係を権力的ならしめ、人類の精神を卑劣ならしめ残酷ならしむる現在の生活組織を除去して真に平等なる組織を創造するに在る。或る者は限りなき物質を蓄積して富を壟断し、或る者は其日の食に饑えて無智と困窮との間にその生をおわるとき生活組織を絶滅して、何人も正しき人間の生活をなし得るとき組織を提出するにある」(主張)とし、その方法については、「かち得んと欲する生活は唯物的ではない。しかしながら彼等の方法は唯物的である」(同前)と云べるのである。そしてみずからをネオ・ヒューマニストと規定し、「今や若きネオ・ヒューマニストの一群は彼等の燃ゆるがごとき理想を確き信仰に託して彼等の世界を築かんがために不撓の戦いを開かんとしている」(同前)と主張する。

この「主張」と「創刊の辞」から、彼らの全体的な立場は社会主義とキリスト教信仰との融合したものであることがわかる。これは当初から新人会のメンバーにキリスト者が多く含まれているということからくるばかりでなく、当時にあつては会員のほとんどすべてがマルクス主義への正しい理解を持っていなかったことにもよる。マルクスによる人間の経済的解放、キリストによる人間の精神的解放が彼らの間では一体となつて、人類解放をめざすネオ・ヒューマニズムという形となつていてと考えられる。

そして彼らの以上のような自己規定からして、当然知識階級の使命が問題となる。麻生の「青年智識階級の一使命」は、その点を補足する役割をはたしている。麻生によれば、青年知識階級の使命は、「現在政治的物質的権力を壟断する権力者と資本家に対して戦いを開かねばならぬと同時に、労働者階級に宣伝して極力これが合理的自覚を促さねばならない。……両極端にある二階級の合理的覚醒を促し、不合理にして不安なる時代を合理にして安固なる理想世界に推移せしむる」ことであるとす。しかしそれはつねに労働者の立場にたつて不合理を解決するということを意味した。

「過去の知識階級は正しく政治的権力階級資本家階級そのものであり、またそれが体よき奴隷であつた」と彼らの先輩・同僚の生き方を批判し、「人道と愛とを標榜する道德」、「人類に平等に物質的幸福をもたらすことを標榜する経済」、

「公平を標榜する法律」などがいかなるものであるかを明らかにして、労働者階級のためにつくすことが使命であると述べている。

このような新人会の知識階級論の立場から、雑誌『デモクラシイ』での研究発表活動も、実践活動もなされた。したがって『デモクラシイ』創刊号にすでに、いわゆるデモクラシイ運動、普選運動に関する論文ではなくして、「無資産階級解放の道(一)」(月島)、「リープクネヒトの軍国主義観(一)」(隅田)、「社会主義及社会運動(一)」(野坂)などの論文があらわれ、また海外時評では英国の労働運動のニュースを紹介し、解放運動消息では松岡駒吉に「友愛会記事」をかかしている。

『デモクラシイ』創刊号は学内外の反響をよび、ことごとく売切れた(発行部数不明)。また四月発行の予定の二号は、佐野学の「無資産階級解放の道(二)」などが禁止指定項目に数えあげられ、発売禁止処分になった。これが新人会がうけた最初の圧迫であった。しかし若い新入会員らはかえって運動に対して熱心になっただけであった。

(2) 高田村への本部移転から赤松らの卒業・麻生の友愛会入りまで

新人会の本部は、四月はじめに、本郷追分町の下宿屋から高田村にある中国の革命家黄興の別邸に移され、そこが本部ならびに合宿所となった。この話は宮崎竜介が持ってきたものである。それは中国革命で孫文と並び称された黄興と宮崎竜介の父滔天とは親友であり、黄興の別邸が空き家となっていて滔天が管理していたが、それを貸してもよいという話であった。滔天は新人会の願いを悦んでききいれ、無条件で貸すことを承諾した。この話がまとまったことによつて合計一三室におよぶ大邸宅が新人会の合宿所となった。その合宿所に最初から入ったのは、赤松、波多野、平、門田、山崎、新明、村上と先輩の麻生夫妻であった。また宮崎と細野は近所に住んでいたのでひっきりなしに合宿所に出

入っていた。麻生は東京日々新聞に勤め、種々の活動を活潑にやりながら、新人会の実際運動面の指導にあたった。

当時新人会亀戸分会は労働組合結成の方向へと進み、五月六日夜、渡辺政之輔、菴沢義夫らの働く永峰セルロイド工場の職工を中心として結成された全国セルロイド職工組合の発会式が行なわれた。また六月五日にはこの組合の日暮里支部が結成された。日暮里支部の労働者からは岩井善作らが新人会に参加した。この全国セルロイド職工組合はその結成ならびに闘争の指導を新人会が行なったために、一名新人セルロイド工組合ともいわれていた。この新人セルロイド工組合の亀戸分会では、七月二九日永峰セルロイド工場の職工三五〇余名が賃金五割増、請負仕事三割値上げを要求してサボタージュをはじめ、三〇日よりストライキに入ったが、一日会社が賃金平均三割臨時手当約二倍半増額を認めたので解決した。しかしこの小さなストライキも新人会の学生にとっては、初めての労働争議指導であり、彼らは熱心に寄付金を集め、決死の戦場におもむくような覚悟で亀戸に駆けつけた。

麻生夫妻が本部で合宿したのはわずか二カ月であったが、麻生にとってはきわめて多忙な時期であった。麻生はまだ東京日々新聞に在籍していたし、一方では黎明会の運動をすすめ、合宿では新人会の学生と研究会をやり、また要請されて労働組合のオルグにも出かけた。

この時期の麻生のなした大きな仕事の一つは雑誌『解放』の発刊の仕事である。黎明会の講演集は、神田の大鑑閣から発行されたが、この大鑑閣には面家莊吉という支配人が居った。彼は黎明会に大きな希望を抱いており、黎明会に月刊雑誌を出すよう要望した、しかし黎明会にその意志がないと知ると黎明会の軟弱な態度を罵倒した。麻生はそのことで面家と論じあったが、それが契機となって協力して月刊雑誌を発行することになった。この月刊雑誌の発行計画は大庭柯公と麻生を援助者として面家を中心にすすめられ、六月に『解放』と名付けて創刊号が出された。

この頃進歩的な綜合雑誌としては、大朝退社組の長谷川如是閑、大山郁夫の『我等』が二月に、山本実彦の『改造』

が四月にあいついで発行されたが、かつては知識階級に大きな影響を与えた『中央公論』が、当時であったは、急進化してきたインテリ層には魅力が失われていたし、『改造』はまだ社会主義者に誌面を解放する積極性はなかった。そのような状況の中で、麻生は『解放』を通じて古い社会主義者との提携を考えていたし、福田徳三にも社会主義者を第一線に復帰させたいという希望もあったので、『解放』はこの線にそって編集がすすめられた。したがって『解放』の誌面は、福田をはじめとする黎明会の学者、麻生、岡上から新人会の学生にいたる新進の思想家、塚、山川夫妻、高阜素之、北原竜雄らの社会主義者などを執筆陣として、新鮮、潑刺な急進的月刊誌として人々の注目を集めた。麻生がこの雑誌の編集主任の一切まかされていたので、発刊早々のこの雑誌の編集をこの年大学を卒業する赤松にやらせることにした。新人会と『解放』との関係はこのようにして作られた。当初の『解放』にのった新人会関係者の論文などをみてみると、赤松・宮崎・村上堯の「法科大学生の眼に映じたる上杉慎吉博士」(第二号)、佐野「労働者運動の指導原理」、岡上守道「露国革命の先駆者としての猶太人」、新明正道「軍国主義の虚像」(以上第三号)などがあり、積極的に『解放』に執筆していることがわかる。

佐野学はこの年の一月に麻生らの水曜会に入ってもなく、満鉄の調査部を辞めて、すでに棚橋・山名が住んでいる月島の労働者街に住所を移し、その後ずっと労働者を対象としての宣伝活動に従事していた。しかし新人会の合宿所で後輩の指導をしている麻生は前述のごとく多忙な毎日を送っているので、六月後輩学生の理論的指導のために佐野が高田村によばれた。佐野が合宿に移って来て、佐野の蔵書と麻生のそれを集めるとかなりの量があり、後輩の勉学意欲を湧かさせるに充分であった。しかし佐野が合宿所に入ってもなく、麻生には合宿所を出て行かなければならない新しい道が待っていた。それは麻生の友愛会入りであった。それには次のような事情があった。

前年の九月に棚橋が友愛会に入ったのは、野坂のイギリス留学志望のため、野坂に代って労働組合の若い芽をのばす

ためであった。棚橋は友愛会に入ってから熱心に活動をつづけていたが、五月に突然活動をやめて故郷信州に帰って音信不通になっていた。当時の友愛会には「知識階級を排斥せよ!」の声がたかまっていた。この当時の友愛会内部の空気は、松岡駒吉の「知識階級に希望す」(『デモクラシー』三号)からうかがうことができる。

松岡はこの中で、労働者の立場から三つの希望をのべている。第一に、知識階級が労働者の指導をしようとする時にはまず労働者の実情をくわしく研究してほしい。第二に、労働者は「過去はもとより現在もなお多くの知識階級から圧迫され、あるいは偽されてきた関係上」知識階級を信頼できないが、これは知識階級自身が播いた種であるから忍んで貰わねばならない。第三に、同情や俠気や物好きからにしても、労働者の幸福を計ろうとまじめに努めた若い知識階級もいたが、労働者の無知無学に愛想をつかし資本家の方に走った。労働者の指導にあたらうとする人は、自分の修めた学問の使命を全うせんため、新文明建設のため努力するだけの信念と覚悟をもってやってほしい。この松岡の指摘するような問題が、労働者と知識階級の間が存在し、知識階級不信の声が労働者の中に高まっていた。

麻生は棚橋への手紙の中で、この問題について、「徒らに無方針に労働者の御気嫌をとるのは、真理に反することだ。サンジカリズム的傾向はいけない。無知なものに対しては矢張我々は真理をもって戦わなければならない。……今度の君の行は君が真に頼りにならぬとの印象を与えた。之は何よりも君にとつて、又我々同志にとつて遺憾な事だ」と、終始労働者の友として生きる知識人としての身がまえを説いている。そして麻生は北沢新次郎(鈴木渡欧中の会長代理)久留、松岡、山名と話しあい、以後の改革案を考え、麻生自身も棚橋の帰京とともに六月末に友愛会本部に入り、平沢計七に代つて出版部長に就任した。それとともに麻生は新人会の合宿所を出た。

この間に機関誌『デモクラシー』の三・四・五号が出たが、麻生「我等労働者の鉄鎖」、宮崎「政治より生活へ」、(以上三号)、麻生「如何に生きる乎」、宮崎「資本主義外交の平和破壊」(以上四号)、「朝鮮の統治者に与う」(主張、赤

松「解放運動の真精神」、宮崎「政治の否定と新興文化」（以上五号）の主張や評論のほか、片島新（佐野学）「マルクスからカントか」（四・五号）、高岡幹夫「プレスコウスカヤ女史」、隅田春雄（石渡？）「カルル・マルクス」（以上四号）、号）、佐野「クロポトキンの社会思想」、波多野謙（鼎）「社会主義と平和運動」、佐々弘雄「クロポトキン」（以上五号）などの研究論文がのせられている。

この時期の『デモクラシー』の論文より察しられることは、学生の理論上の指導が麻生から佐野へと変ったことなども結びあって、アナキズムや修正主義などの研究がみられるようになったことである。岡上守道は、古代ギリシャからスコラ哲学期のアナキズムの研究を三号から五号までのせているし、佐野は「マルクスからカントか」のなかで「ベルンスタインなどの修正派の實際活動は社会主義の墮落と思うが、其理論は深みにとむ」として、シエルツェ・ゲーヴァニッツの講演を紹介し、マルクス主義には哲学と倫理学が欠けるとしてカント哲学の研究をすすめている。また佐野の「クロポトキンの思想」と佐々弘雄の「クロポトキン」は、マルクス主義の宿命観に対抗して、自由と個性を強調するものとして肯定的に紹介されている。そしてこのような先輩の指導は赤松の「解放運動の真精神」（五号）にその影響をあらわしている。「我々は唯物的機械的説明を以て一切万有を解決せんとする論者に断じて与する事は出来ない。我々は飽迄自我の自律と理想の価値とを信じて疑わない」と赤松がいうとき、そこには新カント派の哲学の影響がみられるし、「我が階級のみが不遇なりとの狷介なる朋党的感情を棄てよ。……解放運動の戦士たる者は須らく個人的階級的情実を脱却して、博大なる人類意識に醒めねばならぬ。……クロポトキンの如き、バクーニンの如き、彼等も高貴なる家門に生立ちながら、社会組織の不正不りに反逆し、身を挺して解放運動に殉じた者である」というときアナキズムへの共感を見ることが出来る。

またこの時期、すなわち一九一九年六月に民友社の新時代叢書として『過激派』が出版された。その執筆者は黒田礼

二(岡上)、麻山改介(麻生)、片島新(佐野)であり、四六版三〇〇ページのこの本は、一八六〇年からレーニンまでのロシア社会と社会運動、ソヴィエト憲法からレーニンの国家論にまでおよぶものであり、水曜会時代のロシア革命研究の成果である。

そして七月に新人会は三人の卒業生を送り出した。その中で赤松は雑誌『解放』の編集主任となり、石渡は裁判所に入り(すぐやめて弁護士となる)、河村又介(七高)は政治学研究室の助手となった。

卒業生を送り出したこの休暇中に、岡上は北京からシベリヤへ、佐野は満洲へ、宮崎は中国各地へと旅行した。特に宮崎は新人会代表として北京大学の学生から熱烈な歓迎をうけた。宮崎は、北京大学の学生が新人会の存在を熟知しており、『デモクラシー』を読んでいるのに驚いた。しかしその北京大学生とはこの年の五月四日に始まる五・四運動を闘った学生であったことを考えると何の不思議もない。むしろこの時の北京大学生と東大新人会の学生とのその後の活動と成果を比較してみると、大きなちがいがあるのにむしろ驚く位である。

(3) 二水会メンバー(三輪、嘉治、河西、林)の参加から『先駆』へ、

一九一九年九月一高出身の三輪寿壮、嘉治隆一、河西太一郎、林要の四人が新人会本部入りをしている。この連中を「二水会」メンバーと呼ぶのは、一高卒業後、嘉治、河西、林は一年以上級の又木周夫の邸に、同じく一年以上級の日高信六郎らと合宿し、この合宿を柏風寮と称していた。三輪は先輩の守島伍郎と下宿していたが柏風寮にしばしば往来していた。日高、又木、三輪はあいついで一高全寮委員長をつとめた間からであった。これらの同人は、毎月第二水曜の夜研究会を行ない、「二水会」と称していた⁽⁸⁾。この二水会に新人会の話が持ちこまれたのは、一九一八年暮、林要を赤松と二高在学中の莊原達(ともに徳山中学校の同級生)が訪れ、新人会結成直後の意気込みで柏風寮の人々をアジったことに

はじまる。しかし二水会の人々は赤松の誘いにすぐに応じず、読書し研究して道を選ぼうとした。しかし一九一九年の夏休みが終わった時、又木、日高が卒業し、先輩の守島は外交官として外国に行くことになり、柏風寮は解散され、二水会も開けなくなった。そこに赤松の熱心な勧誘があり、三輪、嘉治、河西、林の四人はそろって新人会の本部に入った。そしていつとはなしに新人会員となり、中心的存在となった。

三輪らが本部に入った時には、佐野も本部を去っていたが、麻生、佐野の本は沢山残されていた。赤松は卒業して『解放』の編集をしていたがまだ本部にいた。三年は波多野と平の二人のみで、宮崎と細野は近くの自宅から本部に通っていた。佐々は滅多に本部にあらわれなかった。村上は病氣静養のため八月末に故郷鹿兒島に帰っており、二年では新明、門田、山崎がいた。門田と山崎は赤松、宮崎とともに亀戸、日暮里を駆けめぐり新人労働同盟を作るのに奔走していた。このような時に四人が本部に入ったのであった。

新学年のはじまるとともに新人会は活潑な活動を展開した。まず学生を対象としての活動から見ると、九月二六日第一回新人会演説会をもち、麻生、赤松、新明、河西が熱弁をふるい、夜は晚餐懇談会を開き、岡上が北京大学生との交換をした時の話をした。この日は東大生のみならず早大の民人同盟会、法政の扶信会の会員のほか朝鮮・中国の留学生も参加した。

またこの夏から各大学の学生団体の糾合と協力を目標として「七月同盟」が組織されていたが、一〇月一〇日「青年文化同盟」の創立大会が牛込矢来俱樂部で開かれた。その綱領には、「一、本同盟は真理に拠りて起つ、二、本同盟は全人類の解放を期す、三、本同盟は正当に社会を改造す」とあり、この日のことを山崎は、「名実ともに青年知識階級の大団結をして労働団体と相呼応して新文化を完成する日のある事を私どもは信じて疑わない」（『デモクラシー』八号）といっているが、青年文化同盟の実際の思想内容は一〇月二五日夜帝大基督教青年会館での創立演説会の演題からうか

かえる。「国際平和主義」(扶信会三木幸造)、「蕭然たる天下の秋」(建設者同盟島田義文)、「何処へ行く」(新人会河西太一郎)、「聴けよ妙なる琴の調べを」(民人同盟会堀江頼広)、「如何に進むべき乎」(一新会竹内正男)、「理想と現実の間」(新人会新明正道)がそれであるが、しかしこのような抽象的な議論では労働団体と呼応することはできないほどに当時の労働運動はすすんできていた。その後の青年文化同盟の活動にはあまり見るべきものはない。

新会はそのようななかで門田を中心に、影響下にある労働組合を結束して九月に新人労働同盟を組織し、第一回国際労働会議の労働代表選出をめぐる運動に積極的に参加した。特に官選労働代表に榎本卯平が決定して後の、一〇月五日の芝公園から明治座にいたる大示威運動にあたっては新人労働同盟は友愛会、信友会、大日本鉱山労働同盟会とともに主催団体の一つとなり、夜の明治座の演説会には門田らが熱弁をふるった。

新会は一月三〇日高田の本部で創立一周年記念会を催した。堺利彦、長谷川是如閑などの大家のほか各方面から新会に好意をもつ人々が出席した。この記念会は赤松、宮崎が中心となって行なった。麻生、棚橋の両先輩はこの頃、日立鉱山、足尾銅山の争議の指導に走りまわっており、一月二日二人は日立での争議交渉顛末報告演説会で官憲と衝突、公務執行妨害で検挙された。それと同じ一月二日夜新会は一周年記念宣伝演説会を神田の帝国教育会講堂で催し、赤松、宮崎、平、河西、門田、新明らが熱弁をふるった。さらに一月七、九日の三晩にわたり同じ教育会講堂で、榎田民蔵「資本経済の本質と社会改造の方向」、大山郁夫「破壊の原理と改造の原理」、森戸辰男「生存権と労働の芸術化」、吉野作造「改造の理想」の学術講演を主催した。三日間五〇銭の有料講演であったが会場は満員で、聴衆は熱気を帯びて講演に耳をかたむけた。しかもこの講演集が大鑑閣より翌年二月発売された。さらに新会は一周年記念事業の一つとして新会叢書の発刊を計画し、第一編としてはオッペンハイマア(岡上守道訳)『国家論』、第二編としてはシュルツ・ゲヴァニッツ(佐野学訳)『カントかマルクスか』が予定されていたが、この二つは実現せず、翌年五

月になり再び計画がねりなおされることになる。

一九一九年九月から一二月の間に『デモクラシイ』は六・七・八号の三冊が発行されているが、六号は当局の圧迫により醜いほどの伏字をせねばならない程にされた（六号は発行されたるも現物を筆者は不幸にして見たことなし）。七号は国際問題号として人類協調の精神を強調した。赤松「国際平和運動と大和民族」、林要「国際労働会議」、山野秋人「万国社会党会議」などの評論のほかに、河西一郎（太一郎）「国際聯盟と労働党（アーサー・ヘンダーソン）」、嘉治隆一「国際主義とは何ぞや（エフ・アドラー）」、新明正道「帝國と民主主義（ラッサアフォード）」の訳がある。また「友愛会大会傍聴記」を山崎一雄が与三吉のペンネームで書いているが、「インテリゲンチエアと労働者の歩調がよく整っていいよ無産階級解放運動の爲めに徹底的に闘う準備は出来た」と大会を評している。麻生、棚橋の友愛会での活動に期待している山崎らの心境がうかがわれる。また一周年記念号である八号の巻頭には宮崎の「一周年の記憶」と赤松の「黎明を仰ぐ新人（新人会創立一周年記念歌）」がある。評論としては、友愛会京都支部長高山義三の「労働運動の根本義」は、労働運動の目的は労働者の所得の増加、労働時間の短縮それ自体にあるのではなく、これらを通じての労働者の精神生活の向上、それによる文明への寄与にある、と論じている。新明正道の「戦争平和其他」は、平和論者を三種にわけ、第一は国家的平和論者であり、それは結局は仮面を被った一つの資本主義的利己主義であるとし、第二は国際平和主義者であり、それは軍国主義を否定するも、資本主義における階級対立の事実関係を無視して労資の協調を説く、この種の平和論はかなり高級であるが、不徹底であるとし、第三は超階級的平和論者であり、彼らは資本主義と軍国主義を否定する、真の平和主義はこの第三の立場にしてはじめて可能であるとしている。その他に平貞蔵「有識者の従属的地位」、門田武雄「鑄型的教育」などがのっている。また翻訳としては、嘉治隆一「端西労働者への訣別の手紙（レーニン）」、「革命時代の一節（トロッキー）」、波多野謙（鼎）「プロレタリアート（カウッキイ）」、赤松克磨「精神と物質（エム・デイ・ペ

「トル」があり、さらに友成与三吉(山崎一雄)が「ローザ・ルクセンブルグに就て」を三ページにわたって書いている。この『デモクラシイ』最終号である八号も発禁となった。理由は明らかでないが、新明の評論、嘉治、波多野の翻訳、山崎の人物伝などが問題となったものようである。

当初から屋島二郎の経済援助をもって発刊されてきた『デモクラシイ』も、八号のうち二号、五号、八号が発禁、六号が発禁同様の処置をうけるようになったこと、五号の発禁の原因となった宮崎が東京地方裁判所から五〇円の罰金の判決を受けたことなどが重なって、『デモクラシイ』は翌一九二〇年二月「先駆」として再出発している。しかし誌名を『先駆』としようという意図は新人会員の中に以前からあり、この改名の予告は『デモクラシイ』四号にはじまっている。また五号ではその理由を、「デモクラシイより先駆に移るは単に形式上の理由からばかりでなく、デモクラシイと云う名だけでは私共の抱いている思想や事業を現わすに不充分であると考えたから」とのべている。また一般書店売りど地方支部発送に依存していた雑誌の販売方法では、あいつぐ発禁による経済的困窮に対抗できないことからして、七号ですでに一口五円(分割払込可)の新人会機関誌発行資金組合を提案している。

このように新人会は発足以来、まず麻生、佐野らの水曜会メンバーの指導のもとに生長し、麻生の友愛会本部入りの後は赤松、宮崎の指導の下に活動がすすめられた。しかしそのなかで赤松、門田、山崎などのような労働運動への積極的参加の方向を歩もうとする者と、二水会メンバーを中心とする学問的研究に主なる関心を持つ者との二つの傾向が次第にはっきりと分れてきた。そしてそれは一九二〇年以降の新人会の問題の一つとなって行くのであるが、それは次第にゆずる。

当時の新人会本部の様子を林要は次のようにのべている。

「新人会での当時の仕事というのは、第一には、機関誌の編輯、校正、発送などであり、第二には、赤松が編輯にあ

たっていた新しい綜合雑誌『解放』の仕事を、チョイチョイ手伝うこと、第三には、新人会の肝入りで組織された新人セルロイド工組合や、また月島その他の労働者たちの座談会や研究会に手分けして出かけること、第四には、学内で宣伝のための例会を開くとか、または学内ないし学外で講演会を催すこと、その他、早稲田その他の学生団体との横の連絡をはかること、など、用事はそれからそれへと絶えなかつた。⁽⁹⁾

また当時の会員全体の思想傾向については、「当時はもろもろの革新思想が渦をまいてゐる時代であつて、政治的デモクラシーやボルシェヴィズムの思想ばかりでなく、社会民主主義、サンジカリズム、I・W・W、ギルド・ソーシャリズム、アナーキズム、フェビアン協会イズム、国家社会主義などのイデオロギーが、北国の春のように一時に咲きた形で、……一々の花について、それを梅とも桜ともハッキリ一々は分ちかねる当時の私たちの理論的低さではあつたが、むろん全体の調子は社会主義的だつたことには相違なかつた。とはいへ、マルキシズム理論をシツカリ身につけてゐるわけでも何でもなく、新カント派の紹介論文の一つ二つも読むと、すぐそれを安易に社会改革や人類解放に結びつけて、齒の浮くような理想主義を私なども振り廻したことがあつた。……いつか赤松君について堺利彦さんを訪れたとき、いつもの調子で赤松が「カントに還れ！」論をやると、堺さんは、多くをいわず、ぼくらのときはカントの否定から始まつたのに、いまの諸君はカントから始める、どうもわからぬ、と一言いわれたことを思いだす。⁽¹⁰⁾」とのべているが、この様な状態が一年年前後の新人会の思想状況であつたといえよう。

(1) 宮崎竜介、前掲書。

(2) 新人会発足の日を明記してゐるのは、河上丈太郎編『麻生久伝』(一〇七ページ)と稲岡進・絲屋寿雄『日本の学生運動』(四四ページ)であり、他はほとんど一二月初旬としてある。正確な日付は不明であるが、一応この日をあげておく。

(3) この名前は、平貞蔵のあげるものと、宮崎竜介のあげるものとに、若干のちがひがある。平はこの中の児島健爾と早坂二郎の二人は後で参加したとしてゐる。『三輪寿荘の生涯』一八三、ページ参照

- (4) 血潮子(宮崎竜介)「亀戸の夜雨」『デモクラシイ』三三〇
- (5) 麻生久「黎明」三五六～三六一ページ
- (6) 星島二郎や「大学評論」などと新入会の関係については、太田雅夫「星島二郎と『大学評論』」(『キリスト教社会問題研究』一
号)、太田雅夫「大正デモクラシー運動と大学評論社グループ」(『同志社法学』一〇二号)に詳しい紹介がある。
- (7) 河上丈太郎編「麻生久伝」一二七ページ
- (8) 二水会については、林要「新入会のところ」(『歴史をつくる学生たち』東大協同組合出版部、昭和三二年)、平貞蔵「東大時代
三輪寿荘」(『三輪寿荘の生涯』昭和四一年)にくわしい。
- (9) 林要「新入会のところ」(前掲書、一七一ページ)
- (10) 同前、一七三～四ページ。

三、『先駆』と『同胞』の時期

(1) 『先駆』時代の活動と思想

『デモクラシイ』より改題された機関誌『先駆』(A5版四八ページ、二、三月号は二〇銭四月号以降二五銭)は、一九二〇年
二月より刊行され、八月号まで七冊刊行されたがこの八月号のみはIWWの歌を掲載したことが理由で発禁となった。

(八月号の現物は入手しえず——筆者)。その間編輯発行人は山崎一雄、発行所は五月号までは高田村、六、七月号は東京市
本郷区駒込運動坂町六六、八月号は本郷区駒込上富士前町五であった。

雑誌の内容については後に詳論するとして、まずこの時期の新入会の活動をみて行こう。

一九二〇年一月一二日、新入会会員達は京都で河上肇、朝永三十郎の両博士をはじめ京都での運動の諸先輩高山義
三、水谷長三郎らを招いて会合を持ち、教えをこい、意見を交換した。当時の彼等は、方向としては社会主義をめざし
てはいたが、その哲学的立場は弁証法的唯物論ではなく、人間解放の哲学をさがし求めている状態であった。「生みの

苦しみに悶える人類の躍進的時期に際して、吾々は哲学なき社会を呪⁽¹⁾う」といい、彼らは左右田博士の下で新カント派の理想主義哲学の研究会を持っていた。一月三〇日には東大で宣伝演説会を持った。大庭柯公が「ロシヤ人解剖」と題してロシヤ革命を論じたほか赤松、三輪、千葉雄次郎が演壇に登った。この頃には東京女子大などの女子大学生も新入会の会合に出席している。また蠟山政道（二高）石浜知行（二高）らが参加したのはこの頃であり、この頃までに一年生の河野密、小岩井浄（一高）住谷悦治（二高）風早八十二、細迫兼光（三高）千葉雄次郎（二高）などが参加している。

この年の一月『経済学研究』創刊号に発表された東大助教森戸辰男の論文「クロポトキンの社会思想の研究」が当局により危険思想とされ、雑誌は発禁となり、森戸と編集署名人の大内兵衛は新聞紙法違反で起訴された。そしてこれに関連して大学の内外で学問の自由について問題になりだした。

一月一六日東大法学部は大会を開いて、森戸擁護のために、「総長と経済学部教授会の反省をうながす。法学部教授会も森戸を支持するよう要望する。興国同志会の行動を不当とみとめ、反省をうながす」という決議をおこなった。雑誌『我等』二月号では長谷川如是閑が「森戸助教筆禍事件の論理的解剖」によって積極的に森戸を支持したし、『朝日』と『毎日』の両紙も支持にかたむき、『中央公論』、『改造』は特集号を発行した。多くの学者達が森戸を守るという狭い立場からではなく、広く学問の自由を守るという立場から森戸擁護にたちあがった。

新人会のこの事件に対する態度は冷淡であったといわれる。⁽²⁾しかし実際はどうであろうか。『先駆』三月号の『銀杏の木蔭（与三吉―山崎一雄）』は、まず第一に、『我等』の長谷川如是閑の論文に同感を表明し、第二に、学生大会が責任追求をせずに反省をうながすという程度に終ったことに不満を表明し、第三に森戸問題の主動者上杉博士の問責、放逐をしなかった学生大会、教授会に不満をのべ、第四に、現在のままでは大学は特権階級の御用学校に過ぎないとし、最後に、「森戸さんの問題は遂に思想家全体の運命の岐える共通の戦闘題目となった。各思想団体が一斉に蹶起してそ

の主張を明らかにし、代表者を法廷に送って極力勝利を確保しようとする努力は当然である。自然に出来上ったものが其陣立も申分ない立派なものだ」と論じている。また同じ号の「森戸問題余憤」(徹?)も同じ論調である。

新人会は二月二七日に東大で阿部次郎を招いて宣伝演説会を開いているが、阿部は「大学の独立」という題で森戸問題に対する当局の態度を批判した。聴衆は会場に満ちあふれた。人々はこの演説会を興国同志会への対抗と考えていた。しかし、これに対し新人会は「先駆」四月号で、「この機会に一言しておくが、本会は今更言論や思想の自由そのものの為の運動には熱中しない主旨である。我等はむしろかかる無用の制度を存せしめる不合理な社会状態を革新せんが為に結集し、宣伝しているものである」と自己の立場を表明している。このような新人会の立場は、当時、戦時恐慌から労働運動が守勢にたたされ、労働運動の中では普選運動全面否定論が主張され、サンジカリズムへの傾斜が強くなっていったこと、また当時の社会主義者の運動方針のなかには民主主義運動を積極的に発展させようとする意図はほとんどなかったこと、考えあわせてみると理解できるであろう。

また前年まで赤松が編集主任であった雑誌『解放』では、赤松の編集に種々の問題があったため、一月より宮崎竜介が編集主任となり、赤松、山崎、新明が援助することになった。そしてそれと同時に新人会の機関誌『先駆』の発売も大鑑閣が引きうけることになり、創刊号から大鑑閣より発売された。しかしその宮崎が伊藤白蓮女史の原稿をとり九州に出かけたことが恋愛事件へと発展した。それで宮崎はけしからんということになり、三月中旬新人会同人は宮崎の除名を決定した。当時の新人会にはピュリタンの潔癖さがあった。宮崎の除名と同時に赤松・山崎・新明は『解放』の編集から手を引くとともに、新人会と『解放』ならびに大鑑閣との関係は全く絶たれることになった。そして五月号からの『先駆』の発売は聚英閣に移された。ついでにその後の『解放』についていうと、『解放』の発行は大鑑閣から分離され、五月から麻生久、岡上守道、佐野学、山名義鶴、宮崎竜介らによってつくられた解放社が行うことになっ

た。この解放社による第二次『解放』はそれ以前のような大家の論文が少なくなったのに反して、堺、山川、荒畑、佐野らがほとんど毎号執筆し、将来第一次共産党を組織する人々の機関誌的な性格を強めていった。

新入会が宮崎を除名にしたあと、新入会は本部として使用してきた黄興邸からの立ちのきを要求され、新しい本部をさがざるをえなかった。そして五月に入って駒込動坂町にやっと小さな借家をさがして移った。しかしこの間の四月一〇〜一八日には赤松、三輪、新明、門田、山崎、千葉雄次郎、小岩井浄の七名が長野県を甲府、伊那、上諏訪、松本、塩尻、長野、上田、長瀬と宣伝演説会や懇談会をして廻った。この頃になると新入会は、東京での活動ばかりでなく、各地の進歩的思想家達との連絡、援助に積極的のりだしていつている。そして続々と支部が結成された。

五月二日わが国最初のメーデーが上野公園で行われた。参加団体は友愛会をはじめ一五組合のほか社会主義者および学生団体であり、参会者五千名、新入会その他の学生団体の会員が制服で参加した姿もみられた。当日のスローガンは、治安警察法一七条撤廃、失業防止、最低賃金法の制定の三つであった。鈴木、松岡、麻生(友愛会)、石渡春雄(全国抗夫組合)など各労働団体の代表のほか堺利彦も演壇にのぼった。赤松、林ら新入会員は制服制帽でメーデー行進の前頭を行くことが、ヴ・ナロードの先頭を行くことにつながるような感激をもって参加した。その夜の明治座でのメーデー記念演説会には、新入会の代表として門田武雄が労働団体、社会主義団体の代表とともに演壇に立った。しかし当時制服制帽でメーデーに参加した学生は一〇余名にすぎなかった。

また同じ五月に新入会は北京大学からの学生運動の代表者、方豪、徐彦之、康白情、孟寿椿、黄白葵の五名を迎え、一日大学の山上御殿で晩餐会を開き、お互の経験の交流を持った。⁽³⁾『先駆』六月号の巻頭言「民国の友を迎う」(隆¹ 嘉治隆一?)には、「生等は従来から国内における虐げられし無産階級のために義憤を感じて極力資本家の横暴を弾劾して来たものであるが、今列強の侵略主義の為に苦しめられつつある貴国の現代を見ては、同じ憤を発せざるを得ない者

である」とのべ、共感を示してはいるものの、日本政府の対華二一カ条要求政策への批判は全くのべられていない。

高田の本部を出なければならなくなったころ、本部に居る者のうちで、波多野、嘉治、河西、三輪、林の五人は七月に卒業することになっていたし、平は赤松と意見が合わず本部をすでに出たので、引越した駒込の本部に入ったのは赤松、門田、山崎、新明の四人であった。そして七月には新会は一〇余名の卒業生を社会に送りだし、学内に残る会員の数は半減するに至るのである。

この間が雑誌『先駆』時代であるが、『先駆』は『デモクラシー』に比して研究誌的であり、同人誌的性格が濃厚である。そして発禁は最終号である八月号のみである。

前に引用したものの以外に主なものを見てみると、まず創刊号(二月)は、「創刊の辞、真理を怖るのみ」、賀川豊彦「若き人の群よ——新会に捧ぐ詩」につづいて、赤松「カントと我等」、山崎「普通選挙と新興文化」があるが、前者は赤松がカントに夢中になって会員全体に新カント哲学の研究をすすめていた時期のものであり、「カントの偉大なる啓示は、炬火の如く我等の行手を照して居る」とのべている、また後者は、「完全なる無産階級の解放が行はれず、依然として搾取階級を存続せしむるものならば、普通選挙は何等意義なきものなりとせざるを得ないと」論じ、従来の普通選挙よりもまず無産者の解放運動を呼びかけている。また河西は「時評」で西伯林増兵反対論を展開している。他は嘉治「労働の組織(ヘーウッド)」、波多野「性的衝動及び結婚(ベーベル)」の研究論文がある。

三月号は、巻頭言につづいて、佐野の「社会主義と農民」がのっているが、これは従来の社会主義者の農民問題に関する政綱の紹介である。また「評論の評論」の中の林の「唯物史観と理想主義」は、河上肇の同名論文を新カント派の立場より評論したものであるし、赤松の「人道主義的政治思想の難点」は、吉野作造の「国家生活の一新」での「一九世紀百年の歴史は人格的理想の実現の発達史である」という評価を、歴史の美しい面のみを強調した一面的な見解であ

ると批判したものである。また前述の森戸問題について「銀杏の木蔭」、「森戸氏問題余憤」がこの月の現実問題への唯一の発言であり、あとは波多野による翻訳「ロシア社会思想の社会学的考察（ヘツカア）」と寄稿朝永三十郎「新思想の哲学的基礎」が主なものである。

四月号では、新明の「『国家社会主義』の批評」は室伏高信がマルクス主義を国家社会主義の範疇に入れたことに異議をとねえながらマルクス主義の国家観を論じたものであり、ほかに門田武雄「女性文化の創造」、林「呪われたる科学」、新居格「労働の人性賦与」、河西「労働の享楽」化に到る道」などの評論がある。またこの四月号の後半はサンジカリズムの研究と題して佐野「行動哲学の方へ」、赤松「ソレルの非観主義と解放運動」、嘉治「各国に現われたるサンジカリズム運動」をのせている。「先駆」がサンジカリズムの研究を特集したのは彼らが正統派マルクス主義よりもサンジカリズムに強い共感を抱く哲学的基礎（新カント派への傾斜、自由なる人格の主張）をもっていたこととともに、当時の労働運動で盛んになって来たサンジカリズムの動きを反映したものであろう。これらの研究で一寸面白いと思われるのは、嘉治の論文であるが、サンジカルズムとして、(イ)仏国の「労働総同盟会CGT」、(ロ)米国の「世界の産業労働者IWW」など、(ハ)英国のギルド・ソシャリズムなどのほかに、(ニ)「ボルセヴィキの運動」をもサンジカリズムに近いものとしてあげていることである。新人会員がボルシェヴィズムを正しく理解するにはまだ一年近い年月が必要であった。

五月号では、まず黒田礼二（岡上守道）が「プチ・ブルジョア論」において、プチ・ブルジョアとアナキストの関係を論じ、嘉治は「虐げられし女工生活の一面」で紡績女工の生活を論じている。また三輪は「社会主義の三傾向」と題して、改良派社会主義、革命的サンジカリズム、社会民主主義の区別を論じている。

六月号は前述の「民国の友を迎う」という巻頭言に次いで、山崎が「時代批判」と題して、尼港事件での政府の政策

の批判、東京市電ストでの労働者の要求・宣言の弁護、我国最初のメーデーと各国のメーデーの記事などをさせている。ほかには秋関直二「代議政治の価値」、佐野「独逸に於けるアナルキスト」、波多野「マックス・スチルネル一面観」、門田訳「政治的権利と其の労働者階級に対する意義(クロボトキン)」などのアナキズム研究が特集されている。また巻末には前述の長野県への宣伝旅行記「信濃路の春」が一〇ページにわたってのせられている。

七月号では、まず新明が「時代批判」として、資本家の労働団体切崩し政策の批判、小作人運動の進むべき方向、軍国主義教育の害毒などを論じている。理論問題では、赤松の「進化論と社会思想」は一六ページにわたり、以下は次号となっている。また研究論文として、千葉「土地資本及労働(オレーヂ)、沢田清兵衛「文学上のユートピア(アレキサンダー・メリアム)、和田元(嘉治隆一)「レーニン夫人と過激派の教育(パウル・ビルコフによる)」などがある。

八月号は、前述のごとく発禁であるので内容を知りえない。

このように『先駆』時代をみてきてわかることは、会員の思想は、一九二〇年のはじめには新カント派の哲学の研究、自由なる人格、人間の解放などの理想主義的傾向を強く示している。それが労働運動内部でのサンジカリズムの勃興の動きとともに、「マルクス主義の宿命論的傾向」、「唯物史観の決定論」からの自由の回復としてアナキズムや、「自由と芸術への強い要求が秘められている」というサンジカリズムへの共観と傾斜を生みだして行くのである。

しかしこの七月新人会は一〇余名の卒業生を送りだした。波多野は同志社、林、河西は大原社会問題研究所、三輪は片山哲の中央法律事務所、嘉治、細野は大学院、蠟山は東大政治学科(吉野研)助手、などとそれぞれ就職先などが決定し、大学を去って行った。新人会は再び赤松と在学生を中心として組織の強化をはかった。

(2) 『同胞』時代の活動と思想

『先駆』廃刊の理由は二つあった。その第一は、財政上の問題であり、ただでさえ四八ページの雑誌発行は苦しかつ

たのが八月号の発禁で致命傷を負ったことであり、第二の理由は、『先駆』では研究と宣伝が混然としており、しかも研究に重点がおかれすぎたことであった。『先駆』者意識の濃厚なインテリがその高踏的態度を捨てて『同胞』意識をもって社会運動に積極的に参加しようというのが、『同胞』への改題の理由であった。それゆえに『同胞』はA4版八ページ、一部一〇銭のパンフレットとなり、その紙面は論説、解説論文、組合や争議の記事、地方支部の報告などからなり、そのほとんどが無署名である。編輯発行人は一〇、一月が赤松、一二〜四月が新明、五月が千葉で都合八冊が発刊されているが、三号（二月）、六号（三月）〜八号（五月）が発禁となっている。

この時期について活動からみていこう。

まず七月に卒業生を送りだした後の組織強化の一策として、九月渡辺政之輔、岩内善作、丹沈平の三人の労働者と赤松克麿、門田武雄の五人で東京支部を作った。これが『同胞』時代の活動の中心となった。またこの年に入学した黒田寿男（六高）、莊原達（二高）らが新人会に参加した。

九月二日には大学で新学年第一回の演説会を開いた（千葉「寄生生活者の幻想」、新明「政治と闘争」、蠟山「唯物論の偶像破壊性」）。一〇月一三日には本部（駒込上富士前町五）第一回イヴニングを開き、講師、堺利彦の「社会主義の分派に就いて」の話を聞いた。この後会員の勉学のためにイヴニングが毎月もたれることになった。一〇月二日第二回演説会（川原次吉郎「解放運動の倫理」、早坂二郎「本能の進化と経済生活」、赤松「無産階級の独裁政治に就いて」）が持たれ、さらに一〇月二五〜七日の三日間神田の帝國教育会で前年にひきつづき第二回学術講演会を催した。

講演は北沢新次郎「労働組合の諸問題」、室伏高信「ギルド社会主義の發達及其原理」、有島武郎「ホイットマンに就いて」、長谷川如是閑「ソリダリティの原理」であり、聴講者は連日六〇〇名をこえる盛会であった。一月には八年振りて仏国より帰国した石川三四郎を招き、一七日大学で演説会をもった（佐々弘雄「ヒューマンイズムの立場」、石川三

四郎「土民生活」)。この頃には新人会は労働者や地方青年の間に支部を作ることに努力し、その支部は札幌、小樽、秋田、仙台、能登、金沢、福井、京都、大阪、広島、佐世保、熊本と全国各地におよんだ。

一月一日には二周年記念会を本部で開いた。各界から数十名の来賓が訪れ盛会であった。その直後の二月一日に日本社会主義同盟の創立大会が神田の青年会館で開かれることになっていたが、その前夜在京同志打合せ会を東京元園町の事務所で開催、会する者二〇〇余名あったので創立大会に変更し創立を宣言した。一〇日夜創立大会にかわる報告演説会を青年会館で開こうとしたが、開会間もなく解散を命ぜられ、会衆と警官の衝突をひきおこし数十名の検束者を出した。新人会を代表して発起人に参加していた赤松もこの時に検束された。二月一五日には新人会は学内でこの年最後の演説会を開いた(風早八十二「唯物史観と日本歴史」、金俊淵「独立人の心理」、権田保之助「理想と現実性と概念の具象性」)。

また先輩の麻生、棚橋、三輪らが鉾山運動の指導を展開しはじめた一〇月頃から赤松、門田らの新入会メンバーも積極的にその運動に参加し、一九二一年一月には北海道夕張に遊説隊を送ったり、年末から帰郷していた赤松は長崎で香焼事件の犠牲者の保釈運動、佐世保炭坑での演説会など九州を遊説して歩いた。こうして赤松や門田らの指導のもとに、新人会は労働運動に積極的に結びついていった。

このような時に総同盟機関誌『労働』一月号に棚橋小虎(総同盟東京聯合会主事)が「労働組合に帰れ」を発表した。その要旨は、急進的な労働者が労働組合を忘れ、いたずらに軽躁浮誇、革命歌を高唱し、警官と小ぜりあいをすることをもって社会主義と誤解し、直接行動と考えるあやまりを戒しめたものである。しかしこの一文はサンジカリストの攻撃的となり、同時に知識階級排斥運動がサンジカリストによっておこされた。ヴ・ナロードという立場から労働運動に参加し、堺、山川などの社会主義者との接触のながで育ってきた新人会のメンバーにとって、棚橋を支持するのか、

サンジカリズムをとるか、堺・山川の社会主義の道を歩むかは問題であった。

当時新人会へ、棚橋の意見が新人会の意見かと質問する者もあったので、新人会は、「それは棚橋君一個の見解であつて、吾会は会全体として此の意見に同じくしているものではない。吾会はデモクラシーの叫び声が社会に充ちていた時に生れ出た会である。その後社会の思想の左傾と共に、現在にあっては会の内部に思想的には幾つかの流れが出来ている。……会の内部でも労働組合主義対社会主義との論争が漸く劇甚ならんとしつつある」と弁明している。

そして学内の会員は一月から三月にかけて毎週木曜に集つて森戸辰雄を招いて『労働者問題』の研究会をやり、労働運動への理解をはかった。

四月一六日には第二学生控室で卒業生の送別会を開いた。約三〇名の会員が集まつた。山崎は大阪時事新聞、門田は東京日々新聞、新明、松沢兼人は関西学院大学にそれぞれ就職が決定した。卒業生のうち大半が関西に行くことになつた。

機関誌『同胞』は組織宣伝活動を目的としていたので全体として思想的内容はとほしい感がある。しかし赤松、門田、山崎らを中心とした中心メンバーの労働者解放への意欲がありありと感ぜられる。

創刊号(二〇月)の創刊の辞は「万物は流転す」と題され、資本家と軍閥の社会から生産者の社会、掠奪者の世界から創造者の世界、抑圧の世界から解放の世界への飛躍が宇宙の摂理であると説き、「麵麩の道德」は、挙国一致や全民協同の欺瞞性を暴露し、労働者の道德とは資本家への反抗であると説いている。また「レーニン論」、「労働露西亞の国家的構造」でボルシェヴィズムの解説を与えている。ルポとして「北九州工業地を巡りて」がのつている。

二号の論説「永遠の過渡期」ではプロレタリア独裁の正当性を論じ、「国民皆労主義」は、ソヴェエト憲法を紹介し、労農ロシヤでの皆労主義を解説しているほか、「プロレタリア専制と消費組合」では消費組合から社会主義的分配法へ

の発展を説いている。争議ルポとしては、「都下新聞社労働争議」と「足尾紀行」がある。

三号の論説「闘争か和合か」では階級闘争と労働者の団結を論じ、「自由労働と奴隷労働」、「労働組合の話」、「仏国革命前の社会組織」、「シドニー・ウェップ」などの解説がある。また「冬の夜話」という三つのたとえ話のつており、これが発禁の対象となったとのことであるが、内容はさほどではない。

四号の論説「労働者と国際連盟」では、国際連盟が労働者の福祉を考えてくれる組織ではないことを説き、国際連盟に期待しすぎることをいましている。ほかに「仏国革命の話」、「カール・リープクネヒト」の解説と「鉄工組合概観」がある。

五号の論説「普選運動と労働階級」は、労働者自身の解放なくして普通は無意味であることを論じ、議会制度の階級性を暴露している。また「軍隊と民主主義」では当時海軍大佐水野広徳によってとなえられた軍の民主化なるものを否定している。「ニコライ・レーニン」の紹介と、争議ルポ「失業と労働者——(1)足立製作所の争議、(2)日本鉄工株式会社の争議」と「奥の細道」(東北・北海道の炭坑旅行記)がある。

六号の論説「奴隷と反抗」では、労働運動は労働者にとって人間となる運動であると説き、あきらめをすてて反抗を選ばべきを教える。「クロポトキンの言葉」、「日露戦争と露国革命」、「私有財産に就て」などの記事と赤松の「筑紫路の旅」のルポがある。また最終ページには「家宅捜査」なる一月二七日新入会本部の家宅捜査の様子を報告している。またこの三月号の奥付に新入会本部員として新明、千葉、小岩井、黒田寿男、荳原達の五人の名があげられている。

七号の論説「寧ろ商品を羨む」では、労働力とその価値以下で売買される現実の分析を行なっている。そのほかに「労働と寄生」、「階級意識に就て」、「英国の労働者教育」があるが、特に「階級意識に就て」は階級意識を強調するサンジカリズムへの親近感を示している。また争議ルポとして「園池製作所の争議」などがのっている。

最終号である八号は巻頭に「五月祭の意義」なる文をかかげ、ほかに「小作人運動の勃興」、「無産者と法律」、「新共産党宣言の一節」、「レーニンとトロッキーの労働組合論」があるが、特に「新共産党宣言の一節」は第三インターナショナルの第一回総会の宣言の紹介である。また争議ルポとしては、赤松の「足尾事件を顧みて」と「足尾事件報告会」がある。赤松は四月一八日の労資双方の妥協点について、「明らかに勝利であると断言する。……聯合会は決して軽率行動に出でず、あくまで結束を固めて威風堂々たる持久的示威運動を行い会社側をして譲歩せしめた。……予は生れて始めて一糸乱れざる労働運動の訓練を見た」とその斗いを評価している。したがって赤松ら新人会の同人の多くは二〇日の明治会館での報告演説会における急進社会主義者やサンジカリストの批判攻撃に対しても、先輩麻生らの合法的闘争による争議解決の方法を肯定し、麻生らを支持する側に立った。しかしサンジカリストの攻撃はその後も昂じ、棚橋は七月東京聯合会主事を辞任することになる。

以上見て来たことからわかるように、『同胞』時代の新人会は、赤松、新明、門田、山崎、小岩井、千葉などを中心として活動がなされ、その理論研究の面ではさほどとりたてて言うほどのものが見られないとしても、麻生、棚橋、三輪らの先輩とともに鉱山労働運動への積極的参加のなかで労働問題を真剣に考え、真の意味での労働者の同胞たらんとした意欲を見ることができるといえる。その意味で、『先駆』時代と全く対称的であるといえよう。そして『同胞』の原稿にはサンジカリズムとボルシェヴィズムとが入りまじっているが、次第にボルシェヴィズムへの理解を示す傾向が見られて来ている。

(1) 『先駆』三月号、「新人会記事」

(2) ねず・まさし『日本現代史 3』、二二六ページ

(3) 新人会員と北京大学生の交流の事情については、松尾尊亮「大正デモクラシーの研究」(青木書店)に詳しい紹介がある。

四、『ナロオド』の時期と新人会の改組

一九二二年四月二六日新会は新入生歓迎の意味で学内で演説会を開いた(黒田寿男「動物的存在より人間的存在へ」、新明「社会に対する迷信」、蠟山「団体権承認前後に於ける英国の社会事情」、約二〇〇の新入生が聴きに集った。

五月三日には新人会メンバーが京都を訪れ、第三高等学校で新人会演説会をもった。会員では新明、山崎、来間恭の三人、そのほかに富田碎花「愛蘭詩人の群」、石川三四郎「進化と表現」の講演が行なわれた。

この頃新会は会員の研究のために、石川三四郎に社会運動史研究の指導をうけた。そして研究は、概論的研究から各国社会運動史の研究へとすすめられた。

五月一九日、公開演説会(細迫兼光「未来の闇黒へ」、佐野学「日本の政治的進化に就て」、吉野作造「思想家の誘惑」、聴衆約三〇〇名。

六月二一日、公開演説会(沢田清兵衛、千葉雄次郎、麻生久、聴衆約四〇〇名。

この年の夏休みに神戸の三菱・川崎両造船所の大争議がおこった。この争議は六月二五日、三菱内燃機の横断組合・団体交渉権の承認など十カ条の嘆願書、七月二日川崎造船所の組合加入の自由など九カ条の要求書に端を発し、七日川崎一万七千、八日三菱一万二千のストライキに発展した。一二日三菱は休業、川崎は労働者による工場管理の宣言となつた。一四日川崎も休業を発表、幹部の首切りと切崩しを開始した。警察も一三日以降デモ禁止を命令、活動家の検挙を開始、一四日には県当局は姫路師団より出兵した。争議団は持久戦を余儀なくされ、二九日のデモ禁止の裏をかいての神社参拝デモも死者一、重傷一五を出す弾圧をうけ、その夜には賀川以下幹部三〇〇余名が検挙された。三一日友愛会は急遽本部を神戸に移し、鈴木文治、松岡駒吉、赤松克麿が指導にあたったが、争議団は窮迫し、刀折れ矢尽きて八

月九日惨敗宣言を發して就業した。

新人会関係者の活動を見ると、赤松は友愛会からの指導者として派遣され、奮闘したし、三輪寿壯と宮崎竜介は自由法曹団の一員として被検挙者の世話と法廷での弁護に献身した。またこの年の四月卒業して大阪時事新報に勤めていた山崎一雄は、記者としての仕事をほって争議のために奮闘した結果退社せざるをえなかった。また学内の会員は宣伝をかねての旅行のなかで神戸の争議の寄附金を集め、三〇円の寄付を行なった。しかし新人会の支部活動へも当局の弾圧はくわえられつつあった。また知識階級排斥というサンジカリズムからの攻撃も新人会員にとってはきびしいものであったようである。当時の状況を「ナロオド」三号は次のように記している。

「神戸の労働争議は別として目下東京におけるすべての団体は鳴を潜めている。官憲の圧迫が辛辣なために手も足も出ぬのか、それとも潜行的行動に出ているのかそれは知らぬが、ともかく余り静かなために地方などではその影響か一向に氣勢が拳らぬらしい。そこを得たりと切り崩しにかかられるので折角出来かけたものも幼芽にして蹂躪せられる。多年の僚友を売って敢なく敵の軍門に降ってスパイに豹変する者、解放の前途遼遠なるに早くも見切りをつけて従順なる猫族に退化する者相続いで頻発する。こんな具合で各地方の支部も萎靡して振わない、宛も落日孤城の様だ。」

実際に九月に信州上諏訪の支部で堺利彦を招いての社会問題講演会を開くことになっていたので本部より小岩井、千葉の兩名がでかけたが、当局の圧迫のために講演会を持てなかった。

夏休みが終つての九月二〇日、賀川豊彦の上京を機に、学内で神戸労働争議についての公開演説会を開いた。出演者は争議で大活躍した賀川、赤松、山崎の三人で、聴衆は定刻前から講堂に詰めかけ立錐の余地のない盛会であった。

一〇月二八日学内で演説会（来間恭、住谷悦治、石浜知行）を開いた。しかしこの頃になると先輩、学生それぞれの間に活動上で意見がわかれ、それをどう解決するかが問題となった。

一月三〇日夜、第二学生控室で三周年記念懇談会を開いた結果、従来の新入会の方針を変更して、以後学生のみ
会とすることに決定した。『ナロオド』六号(二月)の巻頭にその宣言文がのっている。

黎明期の動揺が各人の胸に力強く感ぜられ出した思想界の新氣運に呼応して大学内に新入会が生誕してから、早くも、三ヶ年を経過した。……過去三ヶ年に亘って我等は或は筆により、或は舌によって、我等の是と信ずる処を大胆に闡明し來った。我等はずべての妥協を排して、我等の主張を忠実に守り來った。我等の雑誌は、為めに、当局の忌避に觸れて幾度か発売禁止の厄に遭遇した。又我等の運動の為に、会員中より既に数名の犠牲者をも出した。……

我等は初め我等が為すべき仕事を有する間、我等の結束は敵の如く固きを信じていた。我等は一度結束して立った以上、我等の主義の為に殉すべき決意を疑わなかつた。しかしながら翻つて思うに、個人も亦時代と共に成長する。会員も既に学窓を出でて、実社会にある者半数を占める今日、学生団体として生れたる新入会を其儘社会団体として保持するには幾多の困難があり、不自然な点がある事が感ぜられる。

今や我國の解放運動も漸く具体化して実行期に入りつつある。我等のなすべき仕事は益々多きを加える。我等は此場合寧ろ学窓を出た者が、各人の自由に従い、各自の正当と信ずる処に向つて行動する事は、よりよき方策であると考え、三周年を迎うると共に、我等は新入会を今後大学内の思想団体として存続せしめる事を茲に宣言する。

そして一二月三日、三周年記念懇親会を稲毛で開いた。しかし來会者は十数名に過ぎなかつた。しかし当初から内部関係者のみで集る予定でもあつたし、先輩佐野学を囲んで三年間の会の歩みと、その後の活動の仕方について語りあつた。そして今後の活動として、各高等学校の新思想を抱くグループと連絡をとりながら大きな活動を展開することを計画した。

学生思想団体となつてからの活動をひきつづいて紹介すると、一二月一九日に学内で宣伝演説会(大山郁夫、千葉、細迫、來間)を持つた。学期末にもかかわらず聴衆は多く、その夜の晚餐会は大山郁夫のほか早稲田大学文化会、オーローラ協会、札幌農大その他の会員以外の学生も多数参加し、盛会であつた。また一二月二日には帝大基督教青年

会館でペトロログラード大学出身の小野俊一を招待し、「革命当時における大学生の運動」という氏の実見談を聞いた。一月二四・五の両日、学内で末弘蔵太郎を招いて「農村法律問題」と題する学術講演会を持った。

しかし『ナロオド』六号の来間恭の「敵か味方か」の記事が安寧秩序を害するものとして、来間恭と編輯発行人の千葉雄次郎は新聞紙法違反で起訴された。新人会の会員は四月五日からの公判に備えなければならず、また河野密（朝日新聞）、千葉雄次郎（朝日新聞）住谷悦治（同志社大学）、風早八十二（東大刑法学）、細迫兼光（弁護士）、小岩井浄（弁護士）、来間恭の七人の卒業生を送りだすことになり、『ナロオド』も三月は休刊、四月に出た九号には「廢刊の辞」をのせざるをえなかった。

機関誌『ナロオド』はB5版一六ページ、一〇銭の雑誌で一九二一年七月から二二年四月の間に九冊発行された。編輯発行人は六号までが千葉雄次郎、七号は来間恭、八・九号は黒田寿男であり、発行所は七号までが駒込上富士前町五、八号は東京市外下落合三六三遠藤方、九号は牛込区富久町一一三友岡方である。

『同胞』から『ナロオド』への改題の理由は明らかではない。しかし創刊の辞「未来は民衆の手に」が、「ヴ・ナロード」と叫んで、ロシアの大学生達が民衆運動に投じたのは五十年の昔であった。そして今漸く彼等の播いた種子は收穫せられんとしている。……我等は今豊沃な土壤に種子を播く。すべては未来によって報われる。……」とのべ、巻頭論文、小岩井浄「人民の中へ」が、ロシアのナロードニキの運動を紹介した後、「ヴ・ナロードの運動その者は失敗し少くとも直接的に目的を達したものと云うことは出来ない。併し吾等は〇〇〇（伏字五九字）」とのべていることからして、彼等がヴ・ナロードの運動の限界を理解しながらも、その運動から何かを学ぼうとする姿勢がこの改題の意図であったと考えられる。そして雑誌の性格は、「先駆」、「同胞」よりも『デモクラシー』に近い。執筆者は学生のみでなく、卒業した会員が筆をとったものが割に多くみられる。しかしその内容はボルシェビズムに関係するものが多く、労農口

シヤの研究紹介が割に多く見うけられる。

創刊号をみると、細迫「ロシヤに於ける知識階級の現状(モイッセー・オルジン)」、長田三郎「資本主義下の専制と混乱状態」、千葉「クレムリンの婦人祭」などの学生の研究と早坂二郎「最低賃金の話」、蠟山「ヨセフ・ディーツゲンの生涯」、平「産業革命に就て」、河西「大電争議の顛末」、和田元(嘉治)「海外時潮」、新明「家庭時代に於けるバクーニン」などの卒業した会員の原稿からなっている。

二号の巻頭言「〇〇と〇〇」は、「最近頒発する労働争議は、階級意識に目覚め征服の事実を痛感する全無産階級の、多年の圧制と迫害に対する叛逆の裡にこそ、凡ての妖魔を駆逐して、争なき自由の郷土を建設する偉大なる力は存する」とサンジカリズムへの傾斜を強く示した主張をかかげている。しかし学生の研究としては、千葉「労働露国に於ける青年運動」、川原次吉郎「何うして私は社会主義者になったか(ジャック・ロンドン)」があり、その他には嘉治「マルクスとヘーゲル」、平、蠟山の論文の続篇、和田元(嘉治)「時評―棚橋君友愛会を去る、川崎の罷業と出兵」などがある。

三号の巻頭言「より善きものを」は、「より正しき社会、より合理的な社会はないものであろうか。ある。その可能なるものであるか不可能なるものであるかを論ずる時代は既に去った。此の世界の一角〇〇〇〇(伏字一七字)。長年の戦争と四圍の封鎖と、稀に見る大飢饉との苦しみの中に於てでさえ厳然として身揺ぎもしない、そこに我らは可能的な、より正しい、より合理的なものを見る」と、労働ロシヤをより善き社会として讃えている。また学生の研究として千葉「饑餓の露西亜」、中川実「二種のデモクラシイ」、長田三郎「農業税の意義(レーニン)」などの労働ロシヤの紹介と、川原次吉郎「同族社会時代に於ける労働状態」がある。先輩のものには新明「軍国主義の発達」、早川「労働は神聖なり?」、和田元(嘉治)「PとKとの話」、前山清(山崎一雄)「神戸の大争議に就いて」がある。

四号では、中川実「過激派の苦境」と其対策」、黒田寿男「神聖家族(一)」、山村喬(京大生)「真の人間史」が労働ロ

シヤの紹介とマルクス主義の研究であり、川原「職業社会時代」は労働史の研究のその(二)である。先輩のものには蠟山「ギルドンシャリズムは何を加えたか」、波多野「ロシア労働運動史考(一)」、平「産業革命に就て(三)」、笹川暢(？)「『行為の宣伝』に就いて」があるが、学生の論文は大半がマルクス主義の立場をとっているのに、蠟山の論文はギルドンシャリズムに共感を示するものであり、笹川の論文はアナキズムに与するものである。

『ナロード』の学生の研究論文に一貫してあらわれているボルシェヴィズムへの共感と労農ロシア支持の立場は、五号になるとサンジカリズム批判にまで発展する。小岩井は「総同盟罷業に就て」で、「労働階級の解放は如何なる手段に依つて獲得されるか。サンジカリストは答えて、『それは総同盟罷業である』と云う。何故ならば彼等の考うる処に依れば『総同盟罷業は〇〇と同意義のものである』からである。……然し『それはいつの事か』この問い返えされた時に彼等の多くは眉をひそめないであらうか。……ボルシェヴィズムは総同盟罷業に就いては別に何事も主張していない。併し乍らそれは総同盟罷業以外のもの。を事実として教えた事に依つて大きな問題を提出したのである」と論じ、「総同盟罷業の幻影とその魔力にあくまでも警戒を怠つてはならない」と警告を発している。また千葉は「共産主義と労働組合」で、「共産主義者は『組合を出でよ』と叫ぶべきではなくして、一層ねばり強く労働組合の内部に喰い込んで行くことが必要であるとす。……すべての労働組合を例外なく共産主義者の感鳴者を以て包摂する事、僻隔の地といえども黄色組合の支部のある所には共産主義思想の影響を払める事は、勿論『労働組合を出でよ』と叫んだり、慰みに喜歌劇的な一摺み程の会員しかない労働組合を作る事よりは、はるかに困難な仕事である」と論じ、サンジカリストの労働組合運動のやり方を批判している。また黒田「神聖家族(一)」、杉並隆太「エンゲルスの予言」、刈田民男「一八六八年に於けるマルクスとバクーニン」、千葉「一革命詩人の手紙」はマルクス主義の立場からの研究である。先輩の原稿は波多野「露西亞労働運動史考(一)」だけが収録されている。

六号は前述の新人会改組についての宣言文「新人会三周年」をのせ、以後新人会は学生のみ思想団体である旨を宣言する。後藤信夫(松方三郎—京大生)「露西亜の飢饉」は労農ロシヤ救済についてのレーニンの言葉を紹介している。またその他に藪内映「二月革命後のバクーニン」、来間恭「敵か味方か」があるが、前者はバクーニンへの共感を示しているし、後者は「一挙に〇〇〇〇(伏字二〇字)すべき時はきている。勝利の地まで一投足あるのみ、剣を捨てよ、ハンマーを抛て、筆剣を折れ。未来のことは後で考えよう。今は唯〇〇〇〇〇〇。君は敵か味方か。答えがない。それならば敵だ。階級戦争に於て灰色の態度は断じて許されぬ。灰色、中腰、鶴を一括して敵と見なす。今すぐ〇〇〇〇に参加して身命を擲うつ者のみが味方だという左翼小児病的な百パーセント主義を展開している。この来間の論文が発禁の対象となった。この号での先輩の原稿は友成与三吉(山崎)「軍備縮少と労働者」、佐々弘雄「英国労働党の組織改造」、蠟山「十九世紀百年間の英国労働運動」がある。

新人会改組後の最初の号である七号でもやはり学生会員と卒業生の原稿がのっている。主張として、千葉の「プロレタリアと文化」は、『革命的共産主義は文化の脅威なり』と云う標語が、数ヶ月前日本のある労働者の新聞に大活字で印刷されていたことをとりあげ、「現代の文化はプロレタリアートよりの労働力の搾取なくしては成り立ち得ない。労働者が之に参加する事を拒絶されているからこそ文化は成り立つのである。労働者が起って文化への参加を要求する時、支配階級的な現代文化は消滅する」と文化の階級性について論じ、さらに「ロシヤ革命が文明の破壊でなくして、文明の進歩である事はその極めて進歩的な諸計画の中に覗く事が出来る」とのべている。立花強助「手段としての国家」はブルジョア的國家観をマルクス主義の國家観より否定しようとするものである。また翻訳、研究としては、丘本三郎「独裁制を通じて民主主義に(クララ・ツェトキン)」、杉並隆夫「ヤクシユキンを憶う」、河野密「カール・リープクネヒトの最後」があり、卒業生のものとしては、蠟山の原稿の続きのほかに、田中九一(一九二二年四月卒業、その後新人

会に入る)の「ドイツ共産党の近況」がある。

八号の主張、小岩井の「農村無産階級の解放」は、地主と資本家による農民の二重の搾取と農民の無産階級化を分析し、「小作人の解放は小作人の手に待つ外はない」とし、しかも『土地を小作人の手に』、それは農民が工場労働者と共に蹴起する日に初めて約束される」と労働同盟の思想を説いている。研究としては、河野「ゲルリッツ新綱領短評」、黒田「十月革命後のロシヤ労働組合(ロソウスキ)」があり、卒業生の原稿として、石浜知行「世界革命史概論(エルンスト・ウンテルマン)」と蠟山の原稿の(三)がある。

九号(一九二一年四月)の巻頭に、「廃刊の辞」がのっている。

三月一七日の新人会例会は、機関誌「ナロオド」の廃刊を決議した。

「ナロオド」は大正十年七月に創刊された。終刊号まで回を重ねること九である。……
しかしながら、解放の戦に対する我等の熱心と、我等自身の経済的実力とは、常に必ずしも相伴うものではなかった。経済的事情の変化に応じて、我等は新なる戦術を講じなければならぬ。戦の意志の熾烈さに於て、我等は昨日の我等と変りないつもりである。「ナロオド」の従前通りの続刊は遂に不可能であったとしても、何等かの新なる形式の下に、万難を排して、我等自身の機関誌に就いて再び筆硯の戦を開始する日も遠い将来ではあるまい。……

そしてこの号の原稿はこの春卒業する者も含めてすべて学生によって書かれたものである。主張としては立花「集團意識と個我の悲哀」、細迫「過激社会運動取締法案に反映する資本主義者の自覚」、友岡久雄「民族解放運動に就て」がある。また研究として、松川亮一「労働ロシヤの新経済政策について」(ブハリン)、千葉抄訳「莫斯科紀行」(ゴールドシュミット)と黒田の原稿の(二)がある。

そして編集後記にあたる「下落合だより」は、「四月号が諸君の手許にとどくと同時に、諸君は『ナロオド』の廃刊のことを知られるであろう。……雑誌を通じての我等の○○の行為は、ここしばらく中絶されるであろう。けれども、

行くべきものは行くところまで行き了へねば止まぬ我等が、我等自身の身そのものを提げて、ナロオドの中に〇〇することは機関誌の有無とは独立無関係のことである」と、その後の活動を読者に宣言している。しかし千葉、細迫、小岩井、河野、住谷、風早、来間の七人を社会に送ったあとの新人会は、莊原達、黒田寿男、友岡久雄、猶崎輝、服部英太郎などが残ったのみで、それに志賀義雄、伊藤好道、杉野忠夫などが加わった程度で、極度の不振に陥り、学内での時おりの演説会と地方遊説と学外の社会主義団体との交渉をつづけていたのみである。新人会が再び活潑な活動を展開するのは、一九二三年四月の学友会改革運動以後である。したがって新人会前期の活動は『ナロオド』の廃刊をもって終るといえる。

そしてこの『ナロオド』時代は、後の労農党に関係を持つような細迫、小岩井、河合秀夫などの新人会としての最左翼の実践家を育てた。しかし『ナロオド』時代の新人会はあくまで学生思想団体としての性格が強く、『同胞』時代のような労働運動への積極的参加はみられなかった。

あとがき

新人会の前期三年間の活動を今一度ふりかえてみると、主として(1)学内の啓蒙活動、(2)学外の青年大衆への宣伝啓蒙と支部活動、(3)労働運動への参加の三種の活動をしている。学内の啓蒙活動と学外の宣伝啓蒙活動と支部活動は新人会の創立以来一貫して行なわれている。労働運動への参加の問題は、三年間にその形をいろいろと変えている。新人会結成以前から麻生久らの「水曜会」グループは友愛会の改革という問題ととりくみ、棚橋の友愛会入り、山名の労働者保健調査所活動、その後の麻生自身の友愛会入りという形で積極的に労働運動に参加していつている。また『デモクラシー』時代には、赤松、宮崎らを中心とする新人会員が、渡辺政之輔、岩内善作らと一緒に新人労働組合の結成を行な

い、新人会が直接労働組合を指導しようと努めた。これらの労働組合は麻生が友愛会を中心となって活動する時期に入ると、総同盟の支部となる。『先駆』時代には、会員の主な活動は研究と学内外の啓蒙活動の方に移り、労働組合運動への積極的参加は一部の者の有志的活動となる。それが『同胞』時代に入るとともに、麻生、棚橋らの鉾山争議指導に積極的に協力参加するようになる。『ナロード』時代は、労働運動への直接的参加は少ないが、むしろサンジカリズムとボルシェヴィズムとの対立のなかで労働問題をどうとらえるべきかを研究し、卒業後の活動に備えているという傾向が強くみられる。

また新人会三年間の機関誌にあらわれた原稿から彼らの思想をみると、新人会結成以前には、水曜会グループはロシア革命への共感と社会主義への一応の理解を持っていたが、赤松グループでは石渡以外には社会主義の知識はほとんどなかったようである。したがって『デモクラシー』時代の会員の思想は、大部分が一般的に社会主義を志向しているヒューマニズムであろう。キリスト者としての人間解放の思想とマルクス主義の労働者解放の思想が彼らの中で混然一体をなしているものが多い。それが『先駆』時代に入ると、人格の尊重、自由の自律性の主張という新カント派の理想主義とマルクス主義の結合となり、さらにはアナキズムやサンジカリズムへの傾斜となってあらわれる。『同胞』時代には研究論文が少ないので、彼らの思想を詳しく見ることができないけれども、マルクス主義の理解が次第に正確になってきている。しかしこの時代は理論研究よりも実践をという時代であった。『ナロード』時代の会員の大半はボルシェヴィズムへの共感を表わし、サンジカリズムへの批判をのべている。このような思想の変化をみる時、新人会は「ヴ・ナロード」的姿勢をもって、多種多様なデモクラシー思想から出発したが、一時期サンジカリズムへの傾斜を見せたほかは、一貫して社会主義、マルクス主義への共感をもって進んできたといえる。それゆえにこの時期に新人会で活動をして社会に出て行った人々には徹底したサンジカリストはあらわれなかった。そのことはまた新人会を終始何らかの

形で指導してきた麻生の姿勢の影響ともいえよう。麻生自身は徹底したマルクス主義者とはならなかったが、一貫してマルクス主義者ボルシェヴィズムへの共感を示していたし、堺、山川などの社会主義者との提携のなかでの活動を考えていたことが、後輩の活動スタイルの中にもあらわれている。新人会員の中から共産主義者は育ったが、ついに無政府主義者はあらわれなかった。ここにも水曜会メンバーのロシヤ革命研究以来のボルシェヴィズムへの親近感の様なものから、その理解への発展の如きものを感じる。

新人会(前期)の活動と機関誌にあらわれた彼らの思想からして、この時期に新人会で育った人々がその後のわが国の社会運動、社会思想の発展の指導者へと生長して行ったことは当然といえよう。しかしまた彼らの育った時期によってそれぞれの会員の思想的立場に種々のちがいがあるのも当然である。

新人会卒業生を大別すると実践派と学究派に分けられる。実践派に属する人々は、水曜会グループ、『同胞』時代の卒業生、『ナロオド』時代の卒業生などが主であり、学究派に属するものは、『先駆』時代の卒業生と『ナロオド』時代の卒業生の一部がその主なものであるといえる。

学究派に属する人々は、新人会が学生のみ団体となった後、『先駆』時代の卒業生のなかで赤松、宮崎、石渡などの実践派に批判的な気持を持っていた者を中心として石浜、蠟山、波多野、細野、三輪、嘉治、佐々、平の九人と一九一九年卒の河村又介、一九二一年卒の田中九一、新明、それに京大学生の後藤信夫(松方三郎)の二二人で社会思想社を結成し、一九二二年四月より機関誌社会思想を発刊した。一九二三年には林、河西、千葉、小岩井が参加し、二四年には松沢、住谷、河野、細追、河合秀夫、檜崎輝、金俊淵、友岡久雄などの後輩も参加している。同人の多くは学者であり、マルクス主義の紹介、欧州社会運動の紹介を主とした。新人会出身の学者が全国各地の大学の教壇に立つことになったことは、各大学の民主化を促進した。それがまた次に来る学生運動、共産主義運動の活動家を育てる基盤とな

っている。

また実践派の人々はそれぞれの所属する団体で独自の活動を展開した。しかし今回はそれについて論ずる余裕はない。新人会員の卒業後の活動については機会を改めて論ずるとして、今回は一九二八年当時の実践派の人々の所属党派を参考にあげるにとどめることにする。

社会民衆党の役員には、赤松克麿（中執）、宮崎竜介（中執）、山崎一雄（中執）がおるし、日本大衆党の役員には、河野密（書記次長）、麻生久（中執）、山名義鶴（中執）、三輪寿壮（中執）、黒田寿男（中執）、棚橋小虎（統制委員）、旧労農党には細迫兼光（書記長）、小岩井浄、石渡春雄、河合秀夫、日本共産党には佐野学のほか、労働者で渡辺政之輔、山本懸蔵がいる。しかし前期新人会の卒業生の大半は中間派の日本大衆党に参加しているか、それを支持する立場に立っている。

（新人会卒業生の活動や後期新人会の研究はまた別の機会にゆずりたい。）